

## ブリュッセル毛織物工業史論序説 : 14-15世紀における生産構造の転換を中心に

藤井, 美男  
九州大学大学院経済学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4360769>

---

出版情報 : 経済学研究. 67 (4/5), pp.183-207, 2001-05-31. 九州大学経済学会  
バージョン :  
権利関係 :

# ブリュッセル毛織物工業史論序説

—14-15世紀における生産構造の転換を中心に—

藤 井 美 男

## Résumé

Les villes médiévales du duché de Brabant ont vécu durant des siècles de l'exportation de draps fins. Cependant, des historiens croient depuis longtemps à leurs récessions au bas moyen âge, ceci de par une exagération du rétrécissement des marchés internationaux observé aux XIV<sup>ème</sup> et XV<sup>ème</sup> siècles. Des études récentes pourtant, mettent à jour le fait que la vie urbaine était intense et était renforcée par l'évolution technique de l'industrie, nécessaire afin de trouver de nouveaux marchés.

Le présent article essaie, en se basant sur des travaux ainsi que sur des documents publiés, de prouver que la vie économique de Bruxelles, une des villes les plus représentatives du Brabant sur ce sujet au moyen âge, n'a pas été linéaire du mi-XIV<sup>ème</sup> jusqu'à la fin du XV<sup>ème</sup> siècle. L'histoire de cette ville sera marquée à cette époque par le développement socio-économique des artisans drapiers ainsi que par les nouvelles techniques faisant surgir la "nouvelle" et la "petite" draperie qui coexisteront avec la "grande" draperie qui existait déjà depuis le XIII<sup>ème</sup> siècle.

## 目次

はじめに—本論の課題と目的—

I 研究動向と史料の状況

II ブリュッセル毛織物工業の成長  
—13世紀～14世紀—

- 1) 輸出の初期的拡大
- 2) 高級品の生産と輸出
- 3) 奢侈品市場の形成

III 伝統工業の停滞と再編—15世紀—

- 1) 高級品市場の収縮
- 2) 毛織物製品の転換—新毛織物の出現—

結び

史料

文献一覧

はじめに<sup>1)</sup>—本論の課題と目的—

西欧経済史なかんずく工業化をめぐる歴史において、南ネーデルラントの毛織物工業が占めた地位は極めて大きい。そしてあのH.ピレンヌ以来永らく、近世以降の農村工業と対比される

形で、中世後期までの南ネーデルラント毛織物工業は、フランドル諸都市における営為を中心に把握されてきた(Pirenne [1905] 邦訳大塚 [1955])。

もちろんフランドル都市工業の意義は疑うべくもないが、隣接領邦ブラバントの毛織物工業に関する詳細な知見を得なければ、南ネーデルラント工業の全貌を正確に把握することは困難である。そうした観点から筆者は、フランドル都市イーブルとブラバント都市メヘレンを素材として、比較手工業史とも言うべき手法によって両者を分析し、フランドル都市にはほぼ匹敵す

1) 本稿では、末尾に参考文献の一覧を配し、引用の際は著者・発表年・当該頁数を順にカッコで文中に挿入して引用する。参照する史料も末尾に一括掲示して、同様な引用方式を採っている。なお紙幅の関係から、史料原文呈示は必要最小限にとどめ、邦訳も断念した。また、文中言及する南ネーデルラントの地名については、拙著(藤井 [1998] p.217-24)の各地図に詳しいので参照されたい。

るメヘレンの成長過程および都市工業の持続的生命力の確認という、一定の結論を得た<sup>2)</sup>。

本稿は、ブラバント工業の見直しという基本方針を継続しつつ、上記の結論を補完する目的を持っている。そして、そのための具体的な検討対象として、中世後期ブリュッセルの毛織物工業を取り上げる。というのも、後述するように、特に1980年代以降実証研究の進展によって、南ネーデルラント工業が中世後期に市場変化への対応として構造転換——この場合、伝統的大都市工業における高級品から新毛織物へといった、毛織物製品の転換を軸に、生産組織の編成替え全体を指している——を遂げたことが強調されてきているのだが、この時ブラバント都市工業の一典型として、しばしば挙げられるのがブリュッセルだからである<sup>3)</sup>。

筆者は、都市財政の在り方や工業組織と政治権力とをめぐるといった、都市ブリュッセルのいわば制度的諸側面については、既に旧稿で論じた(藤井 [1994]:[1995]:[2000])。以下は、そうした制度的側面の物的基盤たる毛織物工業の中世後期における変遷過程<sup>4)</sup>について、概観を得ようとする試みである<sup>5)</sup>。

## I 研究動向と史料の状況

17世紀末ブリュッセルはフランス軍の砲撃を蒙り (Van Parys [1956] / Wellens [1962])、それまで保存されていたはずの歴史的資料は壊滅的な打撃を受けた(藤井 [1994] p.195)。ブリュッセルが、ブラバント公・ブルゴーニュ公の宮廷として中世以来有力都市であり続けたにも関わらず、その史的研究所が他都市に比較して大きく先行した訳でもなく、史料の刊行と並行しながら行われるという、若干特異な経過を辿ったのも故ないことではない。

20世紀初頭G. デ=マレ (Des Marex [1904a・b]: [1906]) あるいはJ. クヴリエ (Cuvelier [1912a・b]) による先駆的な研究が見られはするものの、ブリュッセル史研究が本格化するの、1930年代からのF. ファヴレスの業績を通じてである。都市史全般ないし財政史・法制史といった分野の研究動向と史料の伝来状況については、既に詳述したため(藤井 [1994] p.194-7: [2000] p.394-7)、ここでは省略するが、毛織物工業史の研究と史料刊行に限定しても、出発点にまず据えられるのは、やはりファヴレスの仕事なのである<sup>6)</sup>。

G. エスピナとピレンヌ (Espinass [1924]) によるあの膨大な『フランドル毛織物工業史料集』<sup>7)</sup>を先例に、メヘレンについてH. ヨーセン (Joosen [1935]) が行った<sup>8)</sup>と同様、ファヴレスはブリュッセルの繊維工業に関わる史料の刊

2) 以上のような学説史の変遷および議論の詳細については、藤井 [1998] を参照。なお、現在の西欧学界においても、フランドル都市工業重視という基本姿勢はなお根強い。例えば、フランドル一般を対象としたD. ニコラス (Nicholas [1992]:[1997]) および、ヘント (Boone [1988]:[1993b]) やイーブル (Sortor [1998] / Dewilde [1998]) の工業をめぐるといった最近の研究を見よ。

3) 例えば Peeters [1987] p.27:[1992] p.75-82 を参照。

4) ブリュッセル毛織物工業の初期史は、都市的成長過程のそれと相まって極めて興味深い、それらについては他日を期したい。

5) 従ってより広い意味合いからすれば、本論は南ネーデルラント工業全体の構造的変容過程——製品転換および有力都市・中小都市・農村といった空間的変遷をも含意する——をめぐるといった議論の一翼を形成するものである。

6) なお、南ネーデルラント毛織物工業史をめぐるとピレンヌ以降の研究潮流については、拙著(藤井 [1998] p.9-81) を参照されたい。

7) エスピナとピレンヌによるこの史料集については、藤井 [1998] p.84-7 を見よ。

8) ヨーセン編纂の『メヘレン毛織物工業史料集』に関して詳細は、藤井 [1998] p.142-4 を参照。

行を戦後すぐに開始した。当初は生産と販売を規制する初期の工業規約を中心としていたものの (Favresse [1945]:[1946a・b・c])、次第に工業の構造変化を示す史料の発掘に重点を移しながら (Favresse [1947a・b])、後述するように14-15世紀ブリュッセル工業の最大の特徴ともいえる‘新’毛織物 <nouvelle draperie> や‘短’‘薄手’毛織物 <petite draperie>, <draperie légère> と呼ばれる新製品への転換とそれのもつ意義を明らかにしていったのである<sup>9)</sup>。そして、ブリュッセル工業の成長と変容過程に関するこうしたファヴレスによる諸論の中心的部分は、1961年に1本にまとめられ刊行された (Favresse [1961])<sup>10)</sup>。

ファヴレスの開いた端緒は、60年代以降次第により大きな拡がりや深まりを示していく。P. ボナンファン (Bonenfant [1965]) は、ブリュッセルの宗教組織が14世紀末から15世紀にかけてアントウェルペンで救貧向けに安価な毛織物の購入を継続して行ったことを示すこと<sup>11)</sup>、当該時期のアントウェルペン市場の重要性を説き、同時にブリュッセル自体の製品が貧民には向かない高級品に特化していたことを逆証明して見せた。

同様にR. ボーティエ (Bautier [1962]:[1966]) も、ブリュッセル製品が既に14世紀からパリやランディ市場でフランス宮廷向けに購入されていたこと、また14世紀前半以降南欧市場でフラ

ンドル製品を凌駕するほどに成長を遂げ、その製品が高級品として社会的上層で大きな需要を誇ったことを明らかにすることを通じ、ブラバント諸都市とりわけブリュッセル工業の14世紀における高級品市場での成長を検証した<sup>12)</sup>。彼らの研究は、中世後期における製品転換の実証を一層押し進めたという点で、ファヴレスの仕事の重要性を再確認させるものでもあった。

70年代に入ると、生産の高級品特化を肉づけする議論に加え、ブリュッセル工業の構造的変容を西欧市場との関連で把握するという、一次元上の展望が示されていく<sup>13)</sup>。その画期となったのは、ヴァン＝アウトフェンの論文 (Van Uytven [1976]) であった<sup>14)</sup>。彼はメヘレンを中心に据え、ブリュッセル・レウヴェン・ディーストといったブラバント都市工業の近世初頭に至る変遷を鳥瞰し、各都市の輸出動向が微妙に異なることを意識しつつ、フランス以南に向けた初期の輸出市場から、需要変化に呼応して次第に中欧・東欧へと輸出先の比重を移すことで、全体として諸都市が工業活力の維持を図っていたことを強調したのである。なお、70年代にはそれまで未刊行だった毛織物工業に直接関わる史料

9) Favresse [1949]:[1950]:[1951]:[1952]:[1955b]:[1959].

10) なお、直接・間接を問わず、ファヴレス以降ブリュッセル毛織物工業史をめぐる史料の発掘と刊行は、1930年代から50年代にかけて各所に散見される。例えばH. ローラン (Laurent [1934]:[1935]), M. マルテンス (Martens [1943]:[1953b]:[1958]), P. ゴダン (Godding [1953]) などがそれぞれである。

11) 貧民向けのこの毛織物購入はSainte-Gudule教区民によるものである (Bonenfant [1965] p. 12)。なお、Sainte-Gudule教区により一般的な救貧活動については、De Geest [1969] を見よ。

12) もちろん、ベルギー学界はフランスや南欧あるいはドイツ、東欧などとの交易について、輸出先地域の市場に関するあのローラン (Laurent [1935]) や、P. ヴォルフ (Wolff [1950]:[1954]:[1983]), C. フルリンデン (Verlinden [1936]:[1937]:[1943]:[1966]:[1968]:[1976]), H. アンマン (Ammann [1973]), M. マロヴィスト (Malowist [1931]:[1972b]) らの実証研究に多くを学んでいることを付言しておかねばならない。

13) フランドルを中心にしてながらも、広く南ネーデルラント全体について、この方向で中世盛期から中世後期にかけて毛織物工業の変容過程を論じた70年代の代表的文献として、Derville [1972] / Van der Wee [1975] / Nicholas [1976] を挙げる。

14) これに先行して、中世後期-近世初頭の綴織に関するデュヴェルジェによる研究 (Duverger [1971a・b]) が現れていることを付言しておこう。

が、次々と活字化されたこともここで付け加えておかねばなるまい (De Ridder [1974a・b]:[1979]/ Dickstein- Bernard [1977a])<sup>15)</sup>。

その後80年代から90年代にかけては、毛織物取引所をめぐる実証研究が、ディックステイン=ベルナル (Dickstein-Bernard [1981]:[1982]) の手で進捗させられたのを皮切りに、そもそも生産・輸出された毛織物はどのようなものだったのか、という根源的な問いかけに立ち戻った省察に踏み込むのが1つの特徴となった。というのも、高級品特化に関わるあの議論においてさえも、実は当初、生産の原点からする視点は、D. コールマン (Coleman [1969]) の早熟な指摘はあったものの、史料解析の困難さにもよって大幅に立ち後れていたからだ。

しかし、高級品とは何かを正面から問題としたP. チョーリーの印象的な87年論文 (Chorley [1987]) を契機として、毛織物製品の種類と質とをなるべく詳細に分類して見極めようとする研究が、80年代半ば以降90年代後半にかけ、チョーリー (Chorley [1987]:[1993]:[1997])、J. マンロー (Munro [1991]:[1994]:[1997]) らの手により、相次いで出現することとなった<sup>16)</sup>。そしてこれらが、中世後期西欧の市場変化という巨視的側面へ、毛織物の質的变化という微視的分析を適用しようとする研究潮流<sup>17)</sup> へと接合されていく。そうした中、中世後期ブリュッセル工業史についても、ペーテルス (Peeters [1985]:[1987]) に代表される議論が、‘新’毛織物への

製品転換とそれらの在地市場と中・東欧市場への拡大を示すことで、あのファヴレスの時代に比較すると、ミクロとマクロ両側面ではるかに緻密な議論を展開するようになってきているのである。

以上のように豊かな裾野を誇る欧米学界に比べ、我が国では、中世のブリュッセル毛織物工業に関する研究は、わずかに50年代の山瀬論文 [1956b] を数えるのみである。従って本論の目的の一端は、実証分析を通じて、上で述べてきたような現在までの研究史の成果へ寄与することにもある。

## II ブリュッセル毛織物工業の成長

### —13世紀～14世紀—

#### 1) 輸出の初期的拡大

ブリュッセルその他での毛織物工業の成長は、早くとも13世紀後半にしか遡ることはできないとして、ブラバント都市工業の開始点をフランドルに比較して消極的に考える、極めて古典的な見解 (Bautier [1966] p. 35-6)<sup>18)</sup> に対し、直接の証拠はないにせよ、原料羊毛の購入に關

15) また、詳細は本稿での課題ではないが、70年代は経済史的側面と並行して土地制度・人口・行財政といったブリュッセル都市史の包括的研究が行われた多産な時期であることも一言必要である。それらの代表的研究として、Martens [1976a], Dickstein-Bernard [1976a]:[1977a・b]:[1979a], Uyttebroeck [1976], Stengers [1979], De Ridder [1979] を挙げる。また、藤井 [2000] も参照されたい。

16) 本稿の時代射程とは異なるものの、近世初頭フランス領フランドル内外での新毛織物生産に關説したデュプレシの論考 (DuPlessis [1990]:[1997]) にも注目すべきであろう。なお、最近の佐藤論文 ([1999]) が、チョーリー、マンローらに依拠しながら、従来研究史の上で混乱を見ていた、製品と原料羊毛との用語・概念の整理を行い、それをもとに、中世から近世にかけての史の変遷を概述することによって、ビレンヌ時代のものとは全く異なるフランドル毛織物工業の世界を描いていることを、ここで特筆しておかねばならない。この点については後注45) 参照。

17) これについては、Munro [1983] / Van der Wee [1987]:[1988b] / Derville [1987] / Abraham-Thisse [1993a] を見よ。

18) ただしそれでも、毛織物輸出を早くも13世紀初頭に確認できるメヘレンは例外である (藤井 [1998] p. 149)。

するG. デスピイの実証研究 (Despy [1981])や、センヌ河を經由したワイン取引など市場活動の活性化を間接的な拠りどころとして、ブリュッセルが13世紀前半には既に輸出向け毛織物製品を生産していたと、より積極的に捉えようとしているのが最近の論調である (Dickstein-Bernard [1979a] p. 57-9)。

13世紀中葉以降ヴェネチアへの輸出<sup>19)</sup>が確認され、同世紀末にはサン＝トメールやヴァランシエンヌなど南ネーデルラント南部地域の大量の毛織物に交じって、ブリュッセル製品がメヘレンのものとともに、パリ市場あるいはランディヤシャンパーニュ年市を經由して南欧へと姿を現わす<sup>20)</sup>。需要側面から看取できるこのような輸出増大の兆候は、供給側面——即ち1282年における工業規約<sup>21)</sup>の公布——によっても確認することができよう。この規約には、後にブリュッセルの主要な輸出品となる <scharlaken> について、その長さや色に関する条項が記載されており (史料 [1])、既に13世紀末にはそれが有力製品の1つとなっていたことが分かる (Favresse [1955a] p. 297-300)。

14世紀に入ると、ブラバント工業全体が輸出の大幅な拡大を見る中、ブリュッセルもフランス・イタリア・イベリア半島<sup>22)</sup>の各地で飛躍的

な成長を遂げ、各市場においてそれまでのフランドル製品を凌駕するほどの地位を獲得する (Verlinden [1937] p. 237-41)。パリでは、1317年に毛織物の取引所を持つようになり<sup>23)</sup>、在地工業の反感を買うほどであるが、ブリュッセル製品のフランス市場での拡大は押し留めることは既にできなくなっていた (Bautier [1966] p. 37-9)。14世紀半ばにブリュッセル市内で卸売りのための取引所が新たに建設されたという事実は、それ以前からのブリュッセル毛織物の需要増大を雄弁に物語っていよう<sup>24)</sup>。

## 2) 高級品の生産と輸出

14世紀を通じたブリュッセル工業の特徴を一言で表現するならば、高級品市場での成功、ということになる。14世紀中葉イベリア半島で輸入された毛織物延べ22品目中、ブリュッセル製品は反当たり価格で筆頭の地位を占めている事実 (Verlinden [1937] p. 32-3) がその例証となる。

こうした点を一層強調したのが、ボーティエ、ボナンファン論文であった。ボーティエの印象的な言葉を引用しよう。「ヨーロッパ全体で社会の上層に需要を持った奢侈品が重要である。13世紀には未だ見られないこの毛織物は、1300年頃出現し数十年後に流行するようになって

19) ブリュッセル毛織物の輸出动向に関しては、生産地自体の情報は極めて乏しく、従って必然的に輸出先市場に関する諸研究に依存せざるを得ない。その点、以下の行論で明らかであろう。

20) Laurent [1935] p. 75-7 / Verlinden [1937] p. 22 / Bautier [1962]: [1966] p. 36.

21) これは、ブリュッセル現存最古の毛織物工業規約であり、縮充工の権利・義務・責任を前文以下全16条にわたって記述している (Favresse [1938] no. 33, p. 454-61)。

22) イベリア半島については、アラゴン王ハイメ2世による1312年の書簡 (史料 [2]) を見よ。そこには、メヘレン・イーブル・リル・ドゥエなどに次いでブリュッセルの名が挙げられている。

23) パリの取引所について部分的ではあるが、初の言及が1317年に見られ (Bautier [1966] p. 38, n. 6)、1325年にドゥエのそれを譲渡されて以降 (Laurent [1935] p. 97)、14世紀末まで継続して保持していたことが確認されている (史料 [3])。

24) ブラバント公の許可を得たブリュッセルは、1358年に新たな取引所を建設している。13世紀から存在していた公所有の取引所では小売りの権利が留保されていたため、新取引所では卸売りのみに機能が限定されることとなった。なお、取引所経営をめぐる詳細については別稿を考えおり、ここではとりあえずディックステイン＝ベルナルの諸研究 (Dickstein-Bernard [1977a] p. 71: [1981]: [1982]) を挙げるにとどめる。

た。そして14世紀から15世紀初めに至るまで繁栄を誇ったのである。」(Bautier [1966] p. 33)。

1330年以前には、ブリュッセル製品はメヘレンなどと同じ質・価格のものとして、後述する教皇庁やフランス宮廷に需要があったが、やがて、前述した高級品 <scharlaken> で名声を獲得し、他を寄せ付けないほど高価で上質なこの製品が、輸出市場を席捲するようになる。なお、これに次いで、同じく高級品の範疇に入るものの、前者の二分の一から三分の一の価格の <grand moison> も輸出品に挙げられている (Bautier [1966] p. 44-5) 点にも留意しておくべきであろう。

むしろ大衆向けの並製品が全く生産・輸出されなかった訳ではない。上記の高級品以外に並質の <petite draperie> が数えられているし (Bautier [1966] p. 44-5)、流通部面でも、15世紀初頭のアントウェルペン市場で、『金持ち向けの』『王侯貴族向けの』と称されるブリュッセル製品の他に、白色・灰色の安価品が、救貧組織による購入物となっており (史料 [9])、これら大衆品が14世紀半ば以前からも高級品と並行して生産されていたのはほぼ確実とされるからである (Favresse [1951] p. 486 / Bonenfant [1965] p. 180-81)。

14世紀後半に入ると、西欧各地の市場における課税対象の一覧表の中で、ブラバント製品が最上位に置かれるようになる<sup>25)</sup>。また、例えば輸入先で縮絨や最終的な仕上げが行われる際、そうした工程に要するコストの比較においても、ブリュッセル・メヘレン・レウヴェン・ヴィルヴォールドといったブラバント都市の製品が、今や少数者となったフランドルのイーブル製品などと並んで最高額を示している<sup>26)</sup>。こうして外国市場で優勢となったブリュッセルの高級品

は、詐称や模造の対象ともなるほどであった。フランス王シャルル5世による詐称問題の調査命令はそれを示す印象的な例であろう (史料 [13])。

### 3) 奢侈品市場の形成

奢侈的毛織物の生産が、14世紀のブリュッセル工業を特徴づけるとするならば、そうした製品の需要が社会的上層にあったと考えるのは自然であろう。そして、それはここで2つに大別して捉えることができる。

第1は、南ネーデルラント自身を含む諸都市の市民層による需要である。フランドルの製品は比較的ひんぱんに出現していて、どちらかといえば一般市民層の需要を幅広く満たしていたのに対し、ブラバント特にブリュッセル製品は、逆に例外的ともいえるほど富裕な市民層に購入されていた。婚礼の衣装用としてブリュッセルの毛織物を購入したアヴィニヨン商人の記録や公証人文書にはほぼ最高の価格として記録が残るトゥールーズ市場での状況はその好例である (Bautier [1966] p. 46 / Wolff [1950] p. 292)<sup>27)</sup>。

25) 14世紀後半以降、それまでのヘント・ブリュッヘ・イーブルといったフランドル有力諸都市の製品を凌駕する勢いで、ブリュッセルを代表としたブラバント諸都市の製品がザルツブルク・アウグスブルク・ミュンヘンなどの市場にあふれ出ていることをH. アンマンが検証している (Ammann [1973] p. 106-8)。また、「ブラバント毛織物の他に対する優位というのは、価格に応じて課される流通税の大半が、ブリュッセルとメヘレンに、より重く課せられているという事実からも確認できる。」というボーティエの言葉を見よ (Bautier [1966] p. 43)。

26) 1369年のマルセイユでは、これらブラバント・フランドル諸都市の製品については26ドニエの仕上げ価格、フランス、ラングドックの輸入品については、それぞれ20、12ドニエとなっている (Bautier [1966] p. 44)。

27) また、公証人文書を分析したR. ドゥアール (Doehaerd [1941] p. 195, 228) も、ジェノヴァへ輸出していた一群の都市中にブリュッセルを挙げている。

このように、都市有力者たちの形成する需要が、14世紀以降の高級毛織物市場の1つの特徴となっているのだが、このことは同時に、そうした需要が形成されるにはそれだけの経済力基盤が各都市に存在することが前提となる。南フランス市場についてのヴォルフの研究によれば、有力都市とそうでない都市の市政官たちで購入する毛織物の品質が明らかに異なっていた。前者の場合ブリュッセル・メヘレンの高級品をまとい、後者はリエール・ウェルヴィク・イングランドなど、価格面で劣る製品を購入している、という (Wolff [1950] p.294:[1954] p.269-70)。

さて他方でより重要かつ有力だったのが、封建的支配層の形成する市場である。14世紀半ば以前からはほぼ並行して成長してきたメヘレンや、あのリス河流域生産地ウェルヴィク・コルトレイク<sup>28)</sup>などの製品は、高級品か並製品かを問わず広く浸透していたが、ブリュッセルの最高級品は、封建諸侯による需要が大きな意義を持っていた (Bautier [1966] p.46.)。

ここでは、アヴィニヨンの教皇庁とフランス宮廷での言及について瞥見しよう (Peeters [1985] p.123)。既にY.ルヌアールが1935年の論文で、14世紀前半の教皇庁による高級毛織物購入というこの興味深い問題を扱っていた。そして庁内従者——騎士・楯持・衛士——や侍女たちへの支給品、あるいは来庁者への下賜品として、夏・冬物用毛織物を年2回定期的に購入していたこと、そのために、教皇庁出納官がブリュッセルへ派遣され、彼はそこから更にブリュッセル・レウヴェン・メヘレンへ赴き、教皇庁向け

の生産を特別に要請したこと、などを明らかにしたのである (Renouard [1935])。

ボーティエも、良好に残存する教皇庁の会計簿から、14世紀前半に家僕用の毛織物購入において、ブリュッセル製品が増大する傾向を追検証する。つまり、アヴィニヨン宮廷は、ルヌアールの言う通り、年2回ブリュッセル・ヘント・メヘレンなどの毛織物を購入するのが常であり、そして、1324年以降、ドウエやメヘレン製品も併存してはいるものの、教皇庁に出仕する女性たちの衣服は、例外なくブリュッセル毛織物製品によって占められるに至った。ただし、これらは必ずしもすべてが最高級品ではなく、最も上質で枢機卿などに与えられた毛織物はさほど頻繁に購入された訳ではない、という (Bautier [1966] p.39-40)。

14世紀前半から、教皇庁と同様な傾向をフランスにおいても見ることができる。14世紀半ば以降ブリュッセル製品がフランスの諸侯たちほとんどすべてが使用する毛織物となった点が強調される中、1316年段階では見られなかったブリュッセル製品が、1327年王宮に出現し、1352年には圧倒的な数となっていること、この時、ヘント・レウヴェン・ドウエの製品も散見されるものの、アヴィニヨン教皇庁と同様、身分毎に異なった価格の衣服を家僕に給付しているのを見てとれること、が明らかにされる (Bautier [1966] p.42-3)。この時期フランス王室は、ブリュッセル商人から1年間に必要全体数の三分の一の高級毛織物を購入しているが、これは、ブリュッセルの販売量の三分の二を占めていた (Bautier [1962] p.176-7)。

また、アルトワ女伯は1310年代に入って、それまでのイーブルやサン＝トメールの製品に代わり、ブリュッセルの交織製品を好んで自分局

28) リス(レイエ)河中上流域に族生した小都市・農村工業については、拙著(藤井 [1998] p.41)を見られたい。



や家僕の御仕着用にパリ市場で購入している。更に、14世紀半ばフランス王宮と並んでナヴァール宮廷は、祭事用高級衣服のために、パリやランディの年市でブリュッセルの毛織物を購入していること、ドフィネ王アンベール2世の衣服令は、宮廷内の家僕が、身分に応じて価格の異なる衣服を着用していたことを知らしめるが、その場合必ずブリュッセル製品でなければならなかった、というような種々の事実 (Bautier [1962] p. 176-7; [1966] p. 39, 41-2) は、前述した15世紀初頭アントウェルペン市場における、『金持ちの』『王侯貴族の』といった呼称が、ブリュッセル製品の14世紀を通じた特徴であったことを裏書きするのである<sup>29)</sup>。

### Ⅲ 伝統工業の停滞と再編——15世紀——

#### 1) 高級品市場の収縮

さて、14世紀後半に入ると、あれほど成功を納めたブリュッセル工業には次第に陰りがさし始める。同様に、メヘレン・レウヴェンといった伝統的都市の製品も、他のフランドル・ブラバント諸都市 (ウェルヴィク・コルトレイク・ヴィルヴォールド・ヘーレントルス・アールスホットなど) の製品に押される様相を見せるのである (Verlinden [1966] p. 246-51)。

かつてイープル・ヴァランシエンヌといった生産地が経験したような輸出市場のこうした縮小は、およそ1375年から1390年にかけての比較的短期間に生じた現象であった。この時期、ブ

リュッセルの毛織物は退潮の一途をたどり、15世紀初頭には完全に旧来の市場から姿を消す、とさえされる (Bautier [1966] p. 50-4)。

フランス諸侯の嗜好の変化を見ると、前述したナヴァール宮廷が比較的早く1370年代にイングランド製品を購入するようになった。最も明瞭なのはオルレアン公宮廷のそれで、1396年前後に公はブラバント製品から瞬く間にイングランド毛織物へと購入品目を変えている、という。フランス王宮ではブリュッセル製品の使用はなお80年代まで存続したものの、1387年と1393年の間にブリュッセル製品からイングランドやモンティヴィリエの製品へ転換するという変化が見られる。そして、1390年代以降には急激にイングランドやノルマンディー産の毛織物への言及が増加していく。しかも、政治的混乱からイングランド製品の購入が停止した後も、ブリュッセルではなくモンティヴィリエ毛織物の需要が圧倒的となっているのである (Bautier [1966] p. 51-2)。

南フランスとりわけトゥールーズは、大西洋岸からバイヨンヌを經由して流入する北部ヨーロッパ産毛織物にとって一大市場を形成していたが、15世紀に入ると、ヘーレントルス・ディースト・メヘレン・リールなど若干のブラバント毛織物が見られるものの、ブリュッセルの製品はほぼ完全な消滅ともいえる状況となる (Wolff [1950]: [1954] p. 238-41)<sup>30)</sup>。また、イタリア市場においても事情は同様で、ブリュッセルに代わって、リール・ウェルヴィクなどの名前が登場してい

29) 以上のような事実、未刊行の財政・会計史料をもとにアブラハム＝ティースが、14世紀末のブルゴーニュ公による毛織物購入支出を分析し、この時期以前より公の宮廷が高価格でしかも数種類のブリュッセル製品へ傾倒していた、と指摘していること (Abraham-Thisse [1993b] p. 43-8) を付け加えるのも、あながち蛇足ではあるまい。

30) ただし、南欧市場すべてにこうした悲観的な状況が見られる訳ではない。1399年から1410年にかけてブリュッセル・レウヴェン・メヘレンなどの毛織物が、比率はもちろんごく小さいものの、なおスペイン市場で輸入されているからである。この点に関してはVerlinden [1968] p. 684を見よ。

る<sup>31)</sup>。こうした事情を明瞭に示すのがパリ市場での運命であり、かつてそこに取引所を持ったブリュッセル・メヘレン・レウヴェンは、1420年代から言及されなくなってしまうのである (Bautier [1966] p. 53)。

\*  
\* \*

さてここで、ブリュッセル伝統工業の余りにも急激な衰退に、その原因は何か、との疑問が湧いてこよう。これに関しては、第1に外部要因すなわち14世紀末からのイギリス産毛織物の輸出増加およびそれに付随して生じる、ステープル政策にもとづくイギリスの原毛輸出減少などを理由として挙げることは一応可能である (Dickstein-Bernard [1976b] p. 141)。第2に、内部要因つまり、製品の質的悪化が名声を落とし、ひいては市場の全体的縮小の一因となったとする見解もあり得る (Dickstein-Bernard [1976b] p. 141)。

ポーティエは後者に前者の要因を絡めて、次のように推論している。ブリュッセル製品の需要減少の理由は、当然価格でもなく、他産地のものが購入されている事実からして、絹製品などへの嗜好変化でもない。色や仕上げも決定的な理由ではない。というのも、同色でブリュッセルのものだけが需要されておらず、仕上げは他の製品と同様にパリ市場でも行われているからだ。従って、ブリュッセル製品の市場縮小は、良質の羊毛不足や毛織物工業技術の低下に

端を発した毛織物自身の質の劣化と考えざるをえない、と (Bautier [1966] p. 54-5)。

しかしこれら2つを原因とするには、実は論理的に無理がある。まず、原料のイングランド羊毛の不足については、ブリュッセルのみが影響を受けて他産地とりわけ同時期のフランドル中小都市製品が市場を獲得することの説明がつかない。これには、センヌ河沿岸では、毛織物工業の衰退期といわれる15世紀ですら牧羊が行なわれていること、それゆえ、ブリュッセル工業が在地羊毛をもともと加工し、輸入イングランド羊毛の利用はその基盤の上に成立したものと解すべきである、とするディックスティン＝ベルナルが行う自分自身に対する反論 (Dickstein-Bernard [1979a] p. 59) を付け加えることができる<sup>32)</sup>。

他方、ブラバント熟練労働者の流出→技術劣化→毛織物の質的低下という図式を想定するポーティエ<sup>33)</sup>であるが、これにも確固たる説明を見つけるのが困難である。というのも、人的資質の流出そのものの原因が不明確で、手工業者の経済的困窮を原因とするならば、それは都市工業の後退が原因であるとする要因とが同義反復となってしまうからだ (Bautier [1966] p. 56)。実際ポーティエはブラバント手工業者のイギリス・ドイツ・イタリアなどへの移住という事実は示しているものの、その原因について有力

31) 「15世紀に入って再びブラバント毛織物が言及される時、それはもはやブリュッセル製品ではなく、リールのそれであった…。」 (Bautier [1966] p. 53-4)。ブラバント中小都市工業の成功例としてリールがしばしばこのように取り上げられるが、ここでは同工業について詳述する余裕がない。差し当たり、Van der Wee [1966] / Grootaers [1993] / Aerts [1999] を挙げる。

32) 13世紀前半からのブリュッセルによるイングランド羊毛輸入に関してはDespy [1981] を、また1260年以降についてはLuykx [1948] p. 28-9を見よ。なお、南ネーデルラント毛織物工業全体にとって、イングランド羊毛の担った意義については、拙著 (藤井 [1998] p. 9-14) で検討している。

33) ブリュッセル伝統的工業の衰退理由は、中世後期経済の後退と結合する、熟練労働者のブラバントからイングランドやイタリア・ドイツなどへの移住であり、熟練労働者の欠如は、旧来の毛織物の質を保つことを不可能にした、というのである (Bautier [1966] p. 56)。

な証拠を提示している訳ではないのである<sup>34)</sup>。

近世初頭以前の毛織物工業の盛衰について、単一の原因を求めることは今のところ困難である。毛織物需要の変化というのは、単に価格や質によって生起するのではなく、分析の難しい微妙な嗜好変化などに規定されている可能性が強い。ブリュッセルの急速な高級品での成長と、同じく余りにも急激な後退という史実から見て、とりあえずそのように考えておくべきであろう<sup>35)</sup>。

\*  
\* \*

さて、伝統的毛織物工業の収縮は、当然それに支えられてきたブリュッセル都市経済全般の低成長につながってくる。とはいえ外国での毛織物市場では、少なくとも1390年代までなお需要があり<sup>36)</sup>、都市経済全般は必ずしも壊滅的ではない (Martens [1953a] p. 47-8)。問題は15世紀に入ってからである。

特に1420年代以降とりわけ40年代から不況が深刻化する中で、ブリュッセル当局は増大し始めた乞食や浮浪者に対する取締まりや、非熟練労働者の兵役強制をする必要に迫られた (Peeters [1985] p. 135-6)。そればかりではな

い。1434年から明確に不況を認識した都市当局は、センヌ河の浚渫<sup>37)</sup> や外国商人への市場開放などの経済活性化策<sup>38)</sup>、都市財政の負担軽減 (定期金買戻し・都市役人の人数削減) 等の政策さえ試みるようになったのである (Dickstein-Bernard [1976b] p. 148-50)<sup>39)</sup>。

これらのことは、経済的困難が政治・社会的問題へと転化することをも予示していた。とりわけ、不況において直接打撃を蒙った手工業者たちは、14世紀後半から台頭してきた上層を中心に、「ナシオン」という組織に結集し (Favresse [1934a] p. 63-4)、ブリュッセルの政治・経済を長らく統制してきた都市貴族体制 (Favresse [1932] p. 24-45) を1420年代の大改革において終焉に導くことになる<sup>40)</sup>。手工業者層を中心とするこうした動向は、しかしながら、不況期における単なる利害衝突と都市経済の不安要因としてではなく、工業構造の変革に向けた1つの活力源<sup>41)</sup> と捉えることができる (藤井 [2000] p. 408-9)。それを示すのが、次項で省察する‘新’毛織物への転換である。

34) また、後述する通り、14世紀末から15世紀前半にかけては、ブリュッセル手工業者は政治的にも次第に実力をつけ、社会・経済不安を原因とする大規模な移住ということは考え難い。

35) もちろん、時間を限定して考察した場合、地中海における政治的混乱という市場攪乱要因を措定することは可能である (Munro [1991] p. 121-4)。しかし、戦乱を中長期にわたる輸出動向への決定的影響因子とすることに無理があることも明らかである。ここで、輸出工業の動向をプロダクトサイクル論から説明しようとしたヴァン＝デル＝ウェーの議論が想起される (Van der Wee [1984] 邦訳藤井 [1987] p. 249-50)。これは西欧中・近世の毛織物工業史論においては仮説の域を出ていないが、今後なお検討の余地が残されている。

36) 前注30)参照。

37) センヌ河は、ヘント・アントワールペンなどに通じた国際的商業路へ直結しており、その利便性はブリュッセルの社会経済を左右した (Dickstein-Bernard [1979a] p. 58)。

38) 15世紀後半から末にかけて、安価な大衆品であれば、救貧用あるいは宮廷人用にさえ外来産の毛織物が市内に積極的に持ち込まれていることは (Peeters [1985] p. 150, 153)、その1つの典型である。

39) 当該時期のブリュッセル当局の社会・経済政策については、拙稿 (藤井 [1995] p. 104-8) において概観した。

40) 13世紀末から14世紀を通じて、都市貴族7家門を中心に構成される「毛織物ギルド」という組織が、ブリュッセルの毛織物商工業を統括していた。既に14世紀80年代までに彼らの政治的腐敗を暴こうとする一般市民層の動きが活発となっていたが、15世紀に入って、ブラバント公を巻き込んだ社会・政治的騒乱の果てに、旧来の毛織物ギルド組織は瓦解し、手工業者組織「ナシオン」を中心とした新たな工業統制が現出することとなった。こうしたブリュッセルの政治および行財政改革をめぐる経過について詳細は、拙稿 (藤井 [1994]:[2000]) を見られたい。

## 2) 毛織物製品の転換——新毛織物の出現——

15世紀初頭以降、伝統的高級品の輸出市場を大きく減じたブリュッセル工業であるが、そのことは毛織物工業の全面的収縮を意味していた訳ではなかった<sup>42)</sup>。14世紀後半から、生産過程において明らかな質的変化が起こっており、アブラハム＝ティースの言うように、伝統的毛織物の生産量や輸出動向だけを指標として、毛織物生産の単線的後退を考えることはできないのである (Abraham-Thisse [1993b] p. 47-8)。

15世紀前半までイングランド羊毛を利用して生産されたブリュッセルの高級毛織物は、<écarlates> (<scharlaken>)<sup>43)</sup> を典型として <trois états><sup>44)</sup> と総称されていたが、これらに加えて輸出されるようになったのは、<nouvelle draperie>、<petite draperie> など、‘新’毛織物と一般的に把握されている薄手製品の一群である (Bonenfant [1965] p. 181/Dickstein-Bernard [1976b] p. 149)。

41) アンバハト体制成立前を proto-corporatism と呼び、有力市民層による商工業支配から脱却した手工業者のこの自立体制こそが、中世後期の工業特化と分業に寄与したことをつとに強調するのが、ペーテルスである (Peeters [1983] p. 3-5)。ブリュッセルについて彼は、14世紀後半からの毛織物ギルドの後退と手工業者組織アンバハトの台頭が (Peeters [1985] p. 132-3)、後者による排他性と工業規制の強化という点に結実することを、アンバハト加入金の変遷から示す (Peeters [1987] p. 7-8, 25, n. 77)。つまり、徒弟の加入金はかつての二分の一 oud schild (=30 フランドル・グロート) から 1 franc (=52 フランドル・グロート) へ73%も増額した、というのである (史料 [5])。

42) 14世紀まで主力製品だった高級品については、1466年の工業規約がなお言及していることは (史料 [4])、それも含め、製品の多様化を模索することによって中世後期ブリュッセル工業が持続することができたことを示している。

43) <écarlates> は13世紀末からブリュッセルの最高品質の毛織物として輸出の主力製品であった (Favresse [1955a] / 山瀬 [1956a] p. 68-9)。

44) <trois états> (あるいは <trois pas>) は、オランダ語で <drie staten> と記述される、綜統を3個、つまり3つのペダルを備えた織機上で生産される高級梳毛織物の総称である。これについて詳細は、Favresse [1947b] p. 153:[1950] p. 472 を見よ。

史料の発掘・刊行をもとに、同時代に‘新種’とされた毛織物生産<sup>45)</sup>に関する詳細を初めて明らかにしてみせたのは、あのファヴレスであった。まず彼は、<nouvelle draperie> の出現を1443年としていたデ＝マレ説 (Des Marez [1904a] p. 267) の修正から着手する。つまり、1443年に公布された工業規約は、2年前の1441年規約を若干補足しただけのほぼコピーともいえるもので、41年規約において、梳毛糸 <peignés> を使用した青縁織 <draps à lisières bleues> およびベラル織 <bellarts><sup>46)</sup>、紡毛糸 <cardés> による緑縁織 <draps à lisières vertes> が新毛織物として規定され (史料 [6]:[7])、また織布工に対

45) 現在では、西欧繊維工業史において‘新’毛織物が、技術的側面からもまた時間・空間を超えた概念としても、決して統一的に把握できるものではないことが強調されている (Harte [1997b])。最近の我国の研究も、チョーリー (Chorley [1987]:[1988]:[1993]:[1997]) やマンロー (Munro [1990]:[1991]:[1997]) の諸論考を批判的に摂取しつつ、同時代史料での文言解釈の困難さとイギリス繊維工業史論での特有用語法を主たる原因として、西欧学界で用いられてきた用語・概念に長らく混乱が生じていたことを指摘し、とりわけ、かつてピレンヌが喧伝した‘軽’毛織物工業 (Pirenne [1905] 邦訳大塚) が実は、近世初頭以降イギリスで成長する全紡毛による「真正正銘のウルク工業」では決してなく、それはセイに代表される‘軽’毛織物 (小稿では以下‘薄手’織) であったこと、しかもセイは早くも中世盛期から輸出されていた毛織物であると同時に、近世以降は、新基軸の仕上工程が種々導入されながら成長する「新・軽毛織物」だったことを明かにしている (佐藤 [1999] p. 356-71)。ブリュッセルについても、以下本文で考察する通り、‘新’毛織物の意味するものは単純ではない。しかしながら、逆にそのことは、中世盛期から近世初頭まで毛織物生産が一般的な運命を辿ったのではなく、力強い生命力を保ちながら変遷を遂げたことを含意するのだと、いささか結論めいてここで強調しておきたい。

46) 「15世紀南ネーデルラント諸都市——ブリュッヘ・メヘレン・ディースト・リール——では、梳毛糸による高級綾織ベラルで成功を収めていた。これに、ブリュッセルのベラルも加えられる」 (Chorley [1997] p. 16-7, 28-29, n. 35) との主張からすると、ベラルは伝統的高級品に匹敵するものとも考えられる (Cardon [1999] p. 471)。しかし実は、西欧中世に生産された毛織物の種類・名称と品質を一義的に規定することは一般には困難であ

して、旧毛織物である <trois états> 生産との兼営禁止も明示される（史料 [8]）、など新しい製品に関する工業規制<sup>47)</sup> が既にその時点で確立していた、というのである（Favresse [1947b] p.143-6）。

しかもこうした考究は、新毛織物の初出年を2年遡らせるに留まったのではなかった。紡毛織とペラール織については、1441年の規約の中でその製織方法に関する細部の記述がないこと、特に後者については43年規約の最終条項において、<その他は以前定められた仕方に従うように>とあること（史料 [9]）、などを根拠として、実はこれらが1440年頃ではなく既に14世紀末から生産されており、2つの規約はそれを正規化したものか、あるいは1440年以前に文書化された規約を継承したものに過ぎないことを明かにしてみせたのである（Favresse [1950] p.464-7）。

つまり、伝統的高級品の不振のため、織布工たちはコスト削減を目的として、紡毛糸を使用した毛織物の生産に手を染めるようになった。紡毛は梳毛に比べて質が劣るため、ブリュッセル工業を統制していた毛織物ギルド<sup>48)</sup> が、14世

紀を通じてその使用を禁じてきたが（史料 [11]）、1370年代から1385年にかけて、中下層手工業者の政治的・経済的台頭の結果それが黙認されるようになり<sup>49)</sup>、ついに1440年代に入って正式な規約の中で認可されたのだ、というのがファヴレスの想定なのである（Favresse [1950] p.462-5）<sup>50)</sup>。

以上に加え、1416-17年にわずかにだが初めて言及される <petite draperie> が、半世紀後に正当な製品として認知され、その製法が確立していった状況を、1466年1月27日に制定された規約の分析から次のように整理する。つまり、<petite draperie> は、青縁・緑縁織と同じ大きさ<sup>51)</sup> を持つものの、それらに次ぐ等級の製品で、赤い縁取りを施されていたこと <draps à lisières rouges>、低質の原毛を利用することが許可されていること、ただし、緯糸は添油した紡毛糸だが経糸には非添油の梳毛糸が用いられていること<sup>52)</sup>、そして、この最後の点が、14世紀中には見

る。ファヴレスも、フルリンデンの研究（Verlinden [1943]）に依拠しつつ、ブリュッセルのペラールはクラコウで1364年に言及される <balbarth> である可能性を指摘してはいるものの、他方で、15世紀に入ってブリュッセルの工業規約に出現するそれは、同名称ではあるが14世紀のものとは異なる製品であり得る、とも想定している（Favresse [1950] p.466）。

47) 新旧毛織物の決定的な物理的および質的区別は、経糸密度にある。ブリュッセルの新毛織物は伝統的毛織物に比べ、経糸数が三分の二から二分の一であった。これは、コスト削減、市場変化への対応という意味合いを強く持っていたが、他方、例えば種類に応じて使用される羊毛の最低量を定めることで、品質の悪化を押しとどめる努力も払われている（Peeters [1985] p.141）。

48) ブリュッセルの毛織物ギルド <la Gilde> については、Dickstein-Bernard [1979b] / 藤井 [1994]: [2000] を見よ。また前注40) 参照。

49) その顕著な例が、<drommen> と呼ばれる、最も質の劣る紡毛織の存在である。織布工がそれを購入して緯糸をほどいて再使用しようとしたため、この毛織物の購入者は市内での再販売が禁じられるようになった（Peeters [1987] p.6-7）。史料 [10] 参照。

50) 1385年は、毛織物商工業だけでなく都市の行財政を牛耳ってきた毛織物ギルドの権限が大きく削減されるようになった象徴的な年であり、また、1420年代には一般市民が市政参与を実現するようになる（藤井 [1994]: [2000]）。主要生産物の転換に、こうした事情が背景にあったことは明らかである。

51) いずれも長さ幅は、28オーヌと2オーヌとほぼ同じである（Favresse [1951] p.487-8）。なおこの時期依然として生産され続けていた緋色織などの <trois états> も次第に、かつての長さ42オーヌから28オーヌへと規格が変更され、毛織物の質を問わず、こうしたいわば‘短’織が15世紀半ばのブリュッセルを特徴づけてもいる（Peeters [1985] p.139-142）。

52) 質の悪い紡毛糸の場合には特に、後の製織工程を円滑にする目的から製糸段階で油を塗りつけることがしばしば行われた（De Poerck [1951] p.45-7 / 佐藤 [1999] p.361）。こうした種類の紡毛織は14世紀末フランドルでも見られ、<dueten> と呼ばれている（Chorley [1997] p.27）。

られないこの毛織物の特有な名称の由来ではないかと考えられること<sup>53)</sup>、である。

ここで特に留意しなくてはならないのが、1440年頃の緑縁織が製織後の染色を行わない種類であったのに対し<sup>54)</sup>、1466年時点では、青縁織と同様、枠張後に染色が行われるようになっていくこと、他方では、新たに出現した赤縁織がかつての緑縁織に類似して、毛・糸染めによるものか、白地か生成りの製品かを問わず（史料[12]）、製織後には染色されなかった点である（Favresse [1951] p. 491, n. 16）。

以上のことは、並製品の中でも比較的短期間に技術と品質の変化が起こっていることを示しており、15世紀半ばまでにブリュッセル毛織物工業が、高級品から並製品まで緻密な技術的転換を実行していたことを明かにしたという点で、ファヴレスの功績大であった（Favresse [1951]:[1952] p. 86-7）。

中小都市にも目配りをしつつ、南ネーデルラントにおけるブラバント都市工業全体の積極的な位置づけを模索する中で（Peeters [1971]-[1989]）、ペーテルスは、既刊・未刊を問わず史

料の集中的な分析を行ない<sup>55)</sup>、ブリュッセル毛織物工業の技術的変容に関するファヴレスの議論を次のように継承・発展させた<sup>56)</sup>。

14世紀末から15世紀40年代にかけて紡毛織の導入という、全般的動向<sup>57)</sup>についてはファヴレスの見解を踏襲しつつ（Peeters [1987] p. 5）、ペーテルスは、15世紀半ばから後半にかけての短期的な変動に注意を払う。即ち、1440年代から60年代にかけてブリュッセル工業は、並質の紡毛織を定着させつつ、伝統的高級品たるあの〈trois états〉の品質維持をも図ろうとした。しかしそれは、3種類のイングランド羊毛使用強制<sup>58)</sup>および紡毛糸の歩留まり上限設定という制約を伴うものであったため、紡毛織生産に打撃を与える結果となり<sup>59)</sup>、早くも1469年には原毛に関する規定が撤廃されることとなった、というのである（Peeters [1985] p. 142-3）。

この時期、紡毛織の市場拡大が若干あったと想

53) ただし、なぜ〈petite〉の語が使用されるかについては説明していない。ファヴレスは、この赤縁織が西欧繊維工業史において、しばしばサージ〈serge〉と分類される毛織物の属性——即ち非添油の梳毛糸を使用していること——を持つことから、同時代ブリュッセルで言及された〈sargie〉と同義と考えていた自説を取り消す。というのも、ブリュッセルは14世紀から20世紀に至るまで〈sargie〉の語が、ベッドカバーやカーテンなど別な意味にも使われていることが検証できるからであり、従って、それと区別されていたのが〈petite draperie〉なのだ、との最終結論を下すのである（Favresse [1952]）。

54) 1441年・1443年規約で語られる緑縁の紡毛織は、生成り〈grauwe〉か、毛染めない糸染めの紡毛糸による製品〈gemingede〉で、織り上がった後には染色工程が入らないものを指していた（史料[7]）。ところが、1466年にはそうした性格が赤縁織に適用されると同時に、緑縁は縮絨から幅出の後、青縁と同様に染色されるようになっている（Favresse [1951] p. 491-3）。

55) ただし以下で援用するペーテルス論文は、実証過程の行論で逐次的な仕方では当該史料原文を殆ど呈示していないため、とりわけ未刊行史料にその論拠を負っている場合、我々には今のところ追検証の手段がない。未刊のまま残されているそれらの史料が、活字となって世に出るのが待たれる。

56) むろん、ファヴレスの展開した議論はより実証度を高めながら、ペーテルス以前にも、例えばディックステイン＝ベルナル（Dickstein-Bernard [1977a]:[1979a・b]）などによって引き継がれている。

57) ただし、14世紀末にはブリュッセル工業が依然として高級品生産を維持していたことは強調されている。1385年当時の縮充工賃金の比較によると、同じブラバント都市ヘーレンタールス、メヘレンに比べ、5種類の毛織物について上位3種類の賃金は2～3倍と、圧倒的に優位を占めていたことが分かる、という（Peeters [1985] p. 127）。

58) 最高品質のイングランド羊毛とされ、当時ブリュッセルで高級毛織物に使用されたのが、〈March〉、〈Cotswalds〉、〈Lindsey〉の3種類であった。ちなみに、メヘレンではこれらに〈Birkshire〉が加えられていた（藤井 [1998] p. 148）。

59) 紡毛糸は、梳毛糸を準備する段階でも得ることができたため、梳毛糸の量目・品質規制は、そのまま紡毛織物向けの原毛減少へとつながったからである。

定され<sup>60)</sup>、紡糸製造工程における糸車の利用<sup>61)</sup>、縮絨・染色工賃金の自由化などの施策によって、ブリュッセル工業は緑縁・赤縁織のコスト削減を図った。それと同時に、青縁織を中心に旧来の高級品と新毛織物の質的平準化が試みられ<sup>62)</sup>、15世紀末に至って、それまで維持されてきた伝統的高級品生産から新毛織物への決定的な重心移動が行なわれた。それ以降、ベラル織がブリュッセルの最高級品の地位を占め、<trois états> は姿を消していくことになる (Peeters [1985] p. 144-51)。

その後、ブリュッセル製品全体の評価を維持する目的で青縁織の価格切り上げが行われた。品質検査のための印璽として当時、サン＝ミシェル印、サン＝グドゥール印が用いられ、これらが押印される3様の仕方に応じて3種類の青縁ベラルに対し価格設定がなされるとともに、それ以外の押印を受ける青縁織は最低価格とされ、緑縁織にはほぼ同質化していったのである<sup>63)</sup>。

また新毛織物と並んで、以前から存在する綴織やサージ・ファスチアンなどが、15世紀初頭以降伝統製品に代わって表舞台に登場し、それがかつての奢侈的性格の市場を継受するようになる<sup>64)</sup> ことも15世紀ブリュッセル工業の一大特徴

として加えておかねばならない (Peeters [1985] p. 159; [1987] p. 26)。しかもこの動きは15世紀後半にいっそう急激となり、綴織手工業者のアンバハトとしての独立、アントウエルベン年市における輸出の拡大といった動きを見せるまでになっていくのである (Dickstein-Bernard [1976b] p. 155-6)。

\*  
\* \*

さて、以上のような供給構造の変化は、当然に需要構造の変化と直結していた。まず輸出面から見ると、15世紀末まで生産され続けた伝統的製品は、14世紀末までのフランス・地中海に代わり、北・東ヨーロッパへ新しい市場を見出すこととなった (Bautier [1966] p. 56)。15世紀ブリュッセルの製品はフランクフルトあるいはジュネーヴ、ストラズブルを経由して、新市場へ輸出されたのである (Bautier [1966] p. 56 / Peeters [1985] p. 133-4)。もちろんこうした傾向を見せるのは、ひとりブリュッセルだけではない。フランドル有力都市と並んで、レウヴェン・メヘレンなどもブリュッセルとともに、既に14世紀初頭から東欧方面へ輸出を行っていたことを、フルリンデン (Verlinden [1943]) やマロヴィスト (Malowist [1931]:[1972b])、アンマン (Ammann [1973] p. 93, 106-7) などの先駆的諸研究が指摘していた。そして15世紀以降、新毛織物である薄手毛織物が、ブリュッヘを起点にドイツ＝ハンザ<sup>65)</sup>を経由してドイツ、東・中欧へ大量に輸出されたことも、現在ではほぼ定説となっている<sup>66)</sup>。

他方、14世紀末から15世紀前半にかけての市

60) その原因の一端は、1465年から取られたブラバント公による貨幣悪策だ、という (Peeters [1985] p. 141)。

61) 製糸段階での糸車導入という技術革新は、コスト削減に大きなインパクトを持っていた可能性が高い。この点、Chorley [1997] p. 10-15および佐藤 [1999] p. 365を見よ。

62) この傾向は既に1380年代から見て取れる (山瀬 [1956a] p. 69)。

63) この時の青縁ベラルの価格設定はstuiver貨表示で、30, 20, 14~18, 5~7であった (Peeters [1985] p. 151)。

64) 同様な傾向はアラス・パリなど他の伝統的生産地でも見て取れる (Bautier [1966] p. 56-7)。

65) 南ネーデルラントとドイツ＝ハンザとの政治・経済的関係については、最近の我国の研究 (斯波 [1997] p. 11) においても、若干触れられている。

場変化については、ブリュッセルの置かれたやや特殊な地位、すなわち、宮廷所在地としての効果も無視することはできない<sup>67)</sup>。しかもこれは、イーブルやヘントといったフランドル都市の場合と大きく異なるブラバント工業の特色でもある<sup>68)</sup>。

その点を最初に指摘したマルテンスは、ブルゴーニュ公の宮廷所在地となった15世紀ブリュッセルが (Martens [1973])、その建築・彫刻・宝飾・綴織など、他都市に見られない独自の芸術文化とそれに連なる産業を醸成していったとし、それが、以前からのブリュッセルの名声という遺産と、宮廷所在地であるという求心性に基づくことを強調した。15世紀30年代以降ブルゴーニュ公がブラバントを支配することになっても、ブリュッセルが旧来の在地市場を失うような危険はなく、むしろ、それまで培ってきた特産品の名声を保つための努力が可能となった、というのである (Martens [1953a] p. 43-4, 49-52)。

15世紀ブリュッセルを過大評価しようとするマルテンスの理解には一定の留保が必要であるとしても<sup>69)</sup>、その後の研究は決して彼女の基本的視線を否定的には捉えていない。ディックステ

イン＝ベルナールは、ブルゴーニュ公宮廷を訪れる人間の作り出す需要によって、ブリュッセルの奢侈的工芸品生産が活性化され、こうした経済効果は、人口増という形でもはっきり示すことができるとしている。そしてこうした状況は、15世紀末からのマキシミアン帝<sup>70)</sup> 統治開始以降にも継続した、と想定するのである (Dickstein-Bernard [1976b] p. 154, 162-3)。またシュモラー＝メイナールも、ブリュッセルのいわば‘首都化’現象が、14世紀の奢侈品工業の成長、その後の君侯への金融業、宗教施設建設、公共施設の充実などをもたらしたことを挙げ、全体としてブリュッセルを取り巻く在地市場の拡がりを確認している (Smolar-Meynart [1985] p. 29)。

以上見てきたように、14-15世紀ブリュッセルの工業は、様々な客観的・外的要因に大きく規定されていた。しかし、その社会・経済的動向が、外部要因によってのみ方向付けられたと考えるのは誤りとなる。例えば上述した、毛織物製品の転換にせよ、‘首都化’現象にせよ、ブリュッセル自身の持つ社会・経済的要素——しかもそれは当然に都市内外の政治的な要素を強く伴って現れる——にも多くを負っていたことを忘れてはならないのである。

## 結び

M. マルテンスは、15世紀ブリュッセルの社会経済的動向を、全般的衰退という単純な結論では片づけられないことを、慧眼にも1950年代に指摘していた。つまり、15世紀ブリュッセルの

66) この点については、主としてJ. マンロー (Munro [1991]) とアブラハム＝ティース (Abraham-Thisse [1993a]) に依拠しつつ拙著 (藤井 [1998] p. 66-9) で詳述した。

67) この点については既に拙稿 (藤井 [1995] p. 106-7) で素描を試みている。

68) もちろん、フランドル毛織物工業にとっても在地市場の重要性が減じられる訳ではない。これについては、藤井 [1998] p. 63-6 を見られたい。

69) マルテンスは、ファヴレスの研究などによって14世紀ブリュッセルの姿は次第に明らかになりつつあるが、15世紀についてはまだ不明のことが多い (Martens [1953a] p. 33-5) として、研究開始当初自らに15世紀ブリュッセル像の構築という責務を課していた感があり、それが15世紀ブリュッセルに対する過大評価の遠因となっているように思える。

70) ブルゴーニュ公家からハプスブルグ家マキシミアンへの公領継承とそれをめぐる諸問題については、差し当たりブロックマンスらの近著 (Blockmans [1997]:[1999]) を参照。



経済的安定が、市内での都市貴族や富裕手工業者による救貧施設等の設立の事実によって推論でき、しかも、14世紀以来吸引し続けていた外部手工業者のブリュッセルへの定住が、15世紀にも引き続き現われていることこそがそれに対する傍証となっている、と (Martens [1953a] p.46-8)。

伝統的工業の衰退という事実を前面に押し出すならば、中世後期とりわけ15世紀のブリュッセルについては不況ばかりが強調されることになる。しかしマルテンスの想定したように、ブリュッセル毛織物工業は14世紀のそれとは異なった形で成長を遂げた、と考えることは十分可能である。

13世紀末から14世紀を通じて主に南欧市場向けの輸出工業を支えたのは、緋色織を代表とする高級品生産であった。この時、都市の経済・社会を掌握していたのは、都市貴族家系の間から構成される毛織物ギルドであり、ブリュッセル工業の成長は、手工業者とこの組織との緊張関係の中で果たされたと言って良い。しかし、全欧的な不況の中で表面化した需要構造の変化は、14世紀後半から15世紀にかけてブリュッセルに製品転換を余儀なくさせることとなった。

とはいえ、高級品輸出の不振という事態に陥りながらも、15世紀を通じてブリュッセル工業は、伝統製品の生産をなお縮小維持しつつ、基本的には並質、場合によっては上質の、新毛織物と称される紡毛織への生産転換を遂げ、在地市場と中欧・東欧市場を開拓することに成功した。

以上のような変化の中で、市政や財政改革を通じて看取できる都市の人的構成の重心は、毛織物ギルドから次第に手工業者＝アンバハトへ

と移っていく。それが、新毛織物や非伝統製品への転換という動向と軌を一にしていたこともまた明らかである。15世紀ブリュッセル毛織物工業は、14世紀輸出工業の繁栄終息と、市場変化への順応・適応という点に特徴づけられている。「中世都市工業の強い生命力」の検証という本稿の目的が、ブリュッセルについても確認されたことをもって結論に代えることとしよう。

## 史料

史料[1] 縮充される毛織物の長さ、色および縮充工の賃金に関する規定 (1282年6月)

①《Di lange gemingde lakene van XLII ellen, dair min dan VI vierendeel gegreinder wollen toe es, selen geven te huren VIs....》

②《Di lange lakene van XLII ellen — blauwe ende witte — selen geven te huren VIs....》

③《Di volders en mogen niet werven noch ontseggen te comme te dragen cort laken tote XXXVII ellen ende I halve, ende dat moeten se oic over cort maken, een lanc laken tote XLII ellen ende een scarlaken tote XLVIII ellen.》

(Favresse [1938] no.33, § 4, § 5, p.457; § 16, p.459-60)

史料[2] 毛織物への課税について、アラゴン王ハイメ2世からフランス王フィリップ＝ル＝ベル＝エル＝宛てた書簡 (1312年12月)

《Item pro petia pannorum de Melines, de Exalon, et de Ipre, de Provis, de Lailha, de Duaxio, de Bruissellis.》

(Laurent [1934] no.20, p.371)

史料[3] 毛織物ギルドがパリに取引所を保持していることを示す文言 (1393-94年)

《Item, in't jaer van XCIII, soe was ghemaect met der ghemeynder gulden dat...; ende daerof sal die gulde hebben een derdendeel ende die halle van Parijs dat ander derdendeel...》

(Favresse [1946b] no.2, § 4, p.194)

史料[4] 伝統的最高級品から並製品の列挙および赤縁織への言及 (1466年1月27日)

《...scarlakene ende lange lakene van den drie staten...; navolgende d'ordenancie van den lakenen metten blauwen

egge gheten bellaerts...; navolgende eene ordenancie van den lakenen metten roeden egge...; van den lakenen metten hare.

Item, dat de vors. blauweren die lakene, die de gulde consenteren sal te verwene, als van den cleynen gewande, te wetene roede eggen, ende alsulken geliken lakene die de goede luden van buten oft van binnen selen doen verwen tot hueren slitene, wel selen moegen baluwen op 't stael van V plc. Om zwerten, maer niet neerde, op de boete van V. s. gr. lakegelts.»  
(Favresse [1951] p.486,n.4)

史料[5] ブリュッセル毛織物アンバトへの加入金増額 (14世紀末)

«Item. In't jair Ons Heren. M.CCC.XCI. ...doen was den groten ambachte gegeven dat alle leerknappen ende alle knappen, die hair ambacht leeren ende copen willen, dat zij geven selen den groten ambacht enen franc Vrancrij, dair men te voren plach te gevene 1/2. oude scilt...»  
(Favresse [1946b] no.5, § 42, p.213)

史料[6] 新毛織物 (ベラール織および青縁織) の生産規定 (1443年6月22日)

«Dit's de ordenancie van der nuwer drapperien als van den bellaerts gemaect ende geordineert bi den borgermeesteren, scepenen ende raidslieden,...

[I] In den iersten, dat men voirtaen sal mogen maken binnen Bruessel lakene, halve lakene ende stucken, hetzij van Hierlenscher wollen, van Ingelschen hopen, van Spaensher wollen, van Schotscher wollen ende van alrehander goeder wollen wel gedrapperiet, uut genomen van lampwollen of van peelwollen, ende die gekympt, blivende altoes twee ellen breed, metten, blauewjn egghe...»

(Favresse [1947b] no.3, § 1, p.155-6)

史料[7] 紡毛織物 (緑縁織) の生産規定 (1441年8月5日)

«Item, bij den borgermeesteren, scepenen ende den goeden luden van den raide der stad van Bruessel gemeynlic es overdragen ende gesloten dat men negheene lakene te Bruessel en sal moigen caerden dan alleene grauwe ende gemingede lakene met gruenen egge,....»  
(Favresse [1947] no.2, § 1, p.149)

史料[8] 新毛織物生産者に対する伝統製品 drie staten の製織禁止規定 (1441年8月5日)

«Item, es voirt overdragen wair 't dat yemant de voirs. grauwe ende gemingde gecaerde lakene of oic bellaerts maecte, ende dairna beraden worde wederomme lakenen van den drie staten te makene, dat hij die lakene van den drie staten niet en sal moigen maken,....»

(Favresse [1947b] no.2, § 4, p.152-3)

史料[9] ベラール織の製法に関する条項 (1443年6月22日)

«Item, alle andere pointen dienende tot den vors. Bellaerts, hetzij van wervene, van vollene, van crympene ende anderssins, dair hiervore af niet verclairt en es, sal men hanteren ende houdn na der ordenancien t' anderen tiden dairop gemaect.»

(Favresse [1947b] no.3, § 25, p.166)

史料[10] drommen 織の市内売買禁止規定 (1372-1373年)

«Item, dat negheen dromencopere dromen copen en sal bennen Brusselle, hij salsse moeten tonen den ghesuoerenen, als hij se uter staet voren ochte draghen wild, op .i. bode van v.s. grote: half der gulden, half den ambachte.»

(Favresse [1946b] no.5, § 36, p.211-2)

史料[11] 紡毛糸および紡毛織の所持禁止規定 (1372-1373年)

«...dat soe waer men inegh ghecaerdder wolle vonde, omme lakene of stucen daeraf te makene, ocht oec stucken of lakenen, die van ghecarder wollen ghemaect sijn, voertane biennen Bruesele vinden sal, dat men die wolle ende die lakene in een vier openbarelec op te—den meerte verberren sal.»

(Favresse [1946b] no.2, § 5, p.196)

史料[12] 非添油の赤縁織を許可する条項 (1466年)

«Item, ende in geliker manieren, soe sal men moegen maken grauwe ende minxele metten roeden egge, op droege werpten, gelijc den witten voere.»

(Favresse [1951] p.492, n.16)

史料[13] フランス王シャルル5世によるフランスでのブリュッセル製品模造・詐称問題の調査 (1375年12月23日)

«Chareles, par la grace de Dieu, roy de France, au prévost de Paris ou à son liutenant, salut. Il est venu à nostre cognoissance par la grief, complainte des marchans de

draps et drapiers de la ville de Bruxelles, fréquentans et repairans en nostre bonne ville de Paris, que en très grant déception de nos subgez et ou préjudice, dommaige et vitupère des diz complaignans, plusires des marchans de draps de nostre dicte ville de Paris ont ou temps passé, baillié, livré et vendu, et encore de jour en jour baillient, livrent et vendent à noz diz subgez, draps qui sont d'autres lieux et pays que de Broixelle pour draps de Broixelle, et souventesfoiz vendu et vendent près de la moitié pluz yceulx draps qu'il ne valent, soubz ombre de ce qu'il dient qu'il sont de Broixelle, come dit est, dont il n'est rien....» (Laurent [1934] no.32, p.390-91)

文 献 — 覽

欧 語

省略形

ASAB → *Annales de la Société Royale d'Archéologie de Bruxelles.*

BCRH → *Bulletin de la Commission Royale d'Histoire.*

HKKM → *Handelingen van de Koninklijke Kring voor Oudheidkunde, Letteren en Kunst van Mechelen.*

RBPH → *Revue Belge de Philologie et d'Histoire.*

Abraham-Thisse, S. [1991] Les relations Hispano-Hanséates au bas moyen âge, in *En la España medieval*, no.14, p.131-161.

Abraham-Thisse, S. [1993a] Le commerce des draps de Flandre en Europe du Nord : faut-il encore parler du déclin de la draperie flamande au bas moyen âge ? in Boone [1993a] p.167-206.

Abraham-Thisse, S. [1993b] Achats et consommation de draps de laine par l'hôtel de Bourgogne, 1370-1380, in Contamine, P. / Dutour, T. / Schnerb, B.(eds.), *Commerce, finances et société (XI<sup>e</sup>-XVI<sup>e</sup> siècles : recueil de travaux d'histoire médiévale offert à M. le Professeur Henri Dubois*, Paris, p.27-70.

Aerts, E. [1990] / Munro, J. (eds.), *Textiles of the Low Countries in European economic history (Tenth International Economic History Congress)*, Leuven.

Aerts, E. [1999] Lier in een langlopend economisch perspectief (1200-1800), in *Lira Elegans*, Jaarboek 6, p.27-59.

Ammann, H. [1973] Deutschland und die Tuchindustrie nordwesteuropas im Mittelalter, in Haase, C.(ed.), *Die Städt des Mittelalter*, t.3, Darmstadt, p.55-136 (origin., in *Hansische Geschichtsblätter*, 1954, Jg.72, p.1-63).

Baerten, J. [1985] De politieke evolutie te Brussel in de 15de eeuw, in *Tijdschrift voor Brusselse geschiedenis*, Jg.2, p.111-122.

Bartier, J. [1942] Un document sur les prévarications et les rivalités du Patriciat bruxellois au XV<sup>e</sup> siècle, in *BCRH*, t.107, p.337-379.

Bautier, R.-H. [1962] Note sur les bruxellois aux foires du Lendit au XIV<sup>e</sup> siècle, in *Cahiers bruxellois*, t.7, p.175-180.

Bautier, R.-H. [1966] La place de la draperie brabançonne et plus particulièrement bruxelloise dans l'industrie textile du moyen âge, in *ASAB*, t.51, (1962-1966), p.31-63.

Blockmans, W. [1997] / Prevenier, W., *De Bourgondiërs. De Nederlanden op weg naar eenheid, 1384-1530*, Amsterdam / Leuven.

Blockmans, W. [1999] / Prevenier, W., *The promised lands: The Low Countries under Burgundian rule, 1369-1530*, Pennsylvania UP.

Bonenfant, P. [1921] Le premier gouvernement démocratique à Bruxelles, in *Revue de l'Université de Bruxelles*, p.566-594.

Bonenfant, P. [1934] Quelques cadres territoriaux de l'histoire de Bruxelles in *ASAB*, t.38, p.5-45.

Bonenfant, P. [1953] Bruxelles et la maison de Bourgogne, in Bruxelles [1953] p.21-32.

Bonenfant, P. [1959] Un dénombrement brabançon inédit du XIV<sup>e</sup> siècle : gens de menie et bourgeoisie foraine dans l'ammanie de Bruxelles, in *BCRH*, t.125, p.295-345.

Bonenfant, P. [1965] Achats de draps pour les pauvres de Bruxelles aux foires d'Anvers de 1393 à 1487. Contribution à l'histoire des petites draperies, in *Festschrift für Hektor Ammann*, Wiesbaden, p.179-192.

Boone, M. [1988] Nieuwe teksten over Gentse draperie: wolaanvoer, productiewijze en controlepraktijken (ca.1456-1568), in *BCRH*, t.154 p.1-61.

Boone, M. [1993a] / Prevenier, W. (eds.), *La draperie ancienne des Pays-Bas : débouchés et stratégies de survie, XIV<sup>e</sup>-XVI<sup>e</sup> siècle. Actes du colloque tenu à Gand, le 28 avril 1992*, Leuven / Apeldoorn.

Boone, M. [1993b] Préface, in Boone [1993a] p.11-14.

Boone, M. [1993c] L'industrie textile à Gand au bas moyen âge ou les résurrections successives d'une activité réputée moribonde, in Boone [1993a] p.15-61.

Bruxelles [1953] *Bruxelles au XV<sup>e</sup> siècle* (Editions de la Librairie Encyclopédique), Bruxelles.

- Cardon, D. [1999] *La draperie au moyen âge: essor d'une grande industrie européenne*, (CNRS éditions), Paris.
- Chorley, P. [1987] The cloth exports of Flanders and northern France during the 13th century : a luxury trade ? in *The economic history review*, vol.40, p.349-379.
- Chorley, P. [1988] English cloth exports during the 13th and early 14th centuries : the continental evidence, in *Historical research*, t.61, p.1-10.
- Chorley, P. [1993] The 'Draperies légères' of Lille, Arras, Tournai, Valenciennes : new materials for new markets ? in Boone [1993a] p.151-166.
- Chorley, P. [1997] The evolution of the woollen, 1300-1700, in Harte [1997a] p. 7-33.
- Clauzel, D. [1990] / Calonne, S., Artisanat rural et marché urbain : la draperie à Lille et dans ses campagnes à la fin du moyen âge, in *Revue du Nord*, t.72, p.531-573.
- Coleman, D.C. [1969] An innovation and its diffusion: the New Draperies, in *The economic history review*, vol.22, p.414-429.
- Craeybeckx, J. [1983] / Daelemans, F.(eds.), *Bijdragen tot de geschiedenis van Vlaanderen en Brabant : sociale en econonisch*, t.1, Brussel,
- Cuvelier, J. [1912a] Le registre aux statuts, ordonnances et admissions du métier des tisserands de laine ou grand-métier de Bruxelles (XV<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècle), in *BCRH*, t.81, p.121-146.
- Cuvelier, J. [1912b] De tapijtwevers van Brussel in de 15de eeuw, in *Verslagen en mededelingen van de koninklijke Vlaamse academie voor taal- en letterkunde*, p.386-399.
- De Geest, C. [1969] Les distributions aux pauvres assurées par la paroisse Sainte-Gudule à Bruxelles au XV<sup>e</sup> siècle, in *Annales de la société belge d'histoire des hôpitaux*, t.7, p.43-84.
- De Poerck, G. [1951] *La draperie médiévale en Flandre et en Artois*, t.1: *Technique et terminologie*, Brugge.
- De Ridder, P. [1974a] De oorkonden verleend door Hertog Jan II van Lotharingen van Brabant en van Limburg (1294-1312) aan de stad Brussel (1303-1312), in *Eigen schoon en de Brabander*, Jg. 57, p.289-321.
- De Ridder, P. [1974b] Onuitgegeven oorkonden van hertog Jan II (1294-1312) van Brabant in verbant met de Mechelse opstand, in *HKKM*, t.78, p.71-92.
- De Ridder, P. [1979] Brussel, residentie der hertogen van Brabant onder Jan I (1267-1294) en Jan II (1294-1312), in *RBPB*, t.57, p.329-341.
- De Stobbeleir, D. [1965] Le nombre des nouveaux membres et la corporation des maçon, tailleurs de pierre, sculpteurs et ardoisiers bruxellois (1388-1503), in *Hommage au Professeur Paul Bonenfant (1899-1965)*, Bruxelles, p.293-332.
- De Sturler, J. [1936] *Les relations politiques et les échanges commerciaux entre le Duché de Brabant et l'Angleterre au Moyen Age*, Paris.
- Derville, A. [1972] Les draperies flamandes et artésiennes vers 1250-1350 : quelques considérations critiques et problématiques, in *Revue du Nord*, t.54, p.353-370.
- Derville, A. [1987] L'héritage des draperies médiévales, in *Revue du Nord*, t.69, p.715-724.
- Des Marez, G. [1904a] *L'organisation du travail à Bruxelles au XV<sup>e</sup> siècle (Mémoires de l'académie royale des sciences, des lettres et des beaux-arts de Belgique)*, t.65), Bruxelles, 1903-1904.
- Des Marez, G. [1904b] Les bogards dans l'industrie drapière à Bruxelles, in *Mélanges Paul Frédéricq : hommage de la société pour le progrès des études philologiques et historiques*, Bruxelles, p.279-287.
- Des Marez, G. [1906] Les luttes sociales à Bruxelles au moyen âge, in *Revue de l'Université de Bruxelles*, 11<sup>e</sup> année, 1905-1906, p.287-323.
- Des Marez, G. [1908] Deux fragments de comptes communaux de Bruxelles du XV<sup>e</sup> siècle, in *ASAB*, t.22, p.229-246.
- Des Marez, G. [1935] Le développement territorial de Bruxelles au moyen âge, in Bonenfant, P. / Quicke, F., *1<sup>er</sup> Congrès international de géographie historique*, t.3, Bruxelles, p.1-90.
- Despy, G. [1981] Secteurs secondaire et tertiaire dans les villes des anciens Pays-Bas au XIII<sup>e</sup> siècle : l'exemple de Michel Wichmar à Bruxelles, in *Acta historica Bruxellensia*, t.4, p.147-165.
- Dewilde, M. [1998] / Eryvynck, A. / Wielemans, A.(eds.), *Ypres and the medieval cloth industry in Flanders: archaeological and historical contributions* (Instituut voor het Archeologisch Patrimonium), Asse / Zellik.
- Dickstein-Bernard, C. [1959] Le compte mensuel de la ville de Bruxelles d'octobre 1405 et la construction de l'aile orientale de l'hôtel de ville, in *Cahiers bruxellois*, t.4, p.246-294.
- Dickstein-Bernard, C. [1965] La voix de l'opposition au sein des institutions bruxelloises 1455-1467, in *Hommage au professeur Paul Bonenfant (1899-1965)*, Bruxelles, p.479-500.

- Dickstein-Bernard, C. [1966] Les comptes bruxellois comme source pour l'histoire des finances urbaines avant le XVI<sup>e</sup> siècle, in *ASAB*, t.51, (1962-1966), p.219-229.
- Dickstein-Bernard, C. [1974] L'administration de la Chaussée à Bruxelles aux XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles, in *Annales du XLIII<sup>e</sup> Congrès de la fédération des cercles d'archéologie et d'histoire de Belgique*, p.79-83.
- Dickstein-Bernard, C. [1976a] Une ville en expansion (1291-1374), in Martens [1976a] p.99-138.
- Dickstein-Bernard, C. [1976b] Bruxelles, résidence princière (1375-1500), in Martens [1976a] p.139-165.
- Dickstein-Bernard, C. [1977a] *La gestion financière d'une capitale à ses débuts: Bruxelles, 1334-1467*, Bruxelles.
- Dickstein-Bernard, C. [1977b] Paupérisme et sources aux pauvres à Bruxelles au XV<sup>e</sup> siècle, in *RBPH*, t.55, p.390-415.
- Dickstein-Bernard, C. [1979a] Activité économique et développement urbain à Bruxelles (XIII<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles), in *Cahiers bruxellois*, t.24, p.52-62.
- Dickstein-Bernard, C. [1979b] De Gilde, in Stengers [1979] p.51-55.
- Dickstein-Bernard, C. [1979c] Sociale aspecten, in Stengers [1979] p.69-74.
- Dickstein-Bernard, C. [1981] L'organisation du commerce dans les halles aux draps: l'exemple de Bruxelles au XIV<sup>e</sup> siècle, in *Mélanges Mina Martens (ASAB)*, t. 58), p.69-90.
- Dickstein-Bernard, C. [1982] L'organisation du commerce dans les halles aux draps de Bruxelles au XVI<sup>e</sup> siècle, in *Revue du Nord*, t.44, p.235-236.
- Dickstein-Bernard, C. [1988] Répertoire chronologique et analytique des comptes complets, fragments et extraits des comptes communaux de Bruxelles qui subsistent pour la période antérieure à 1570, in *Cahiers bruxellois*, t.29, p.5-78.
- Dickstein-Bernard, C. [1995] Actes du tribunal de la gilde drapière de Bruxelles, 1335-1435, in *Bulletin de la commission royale pour la publication des anciennes lois et ordonnances de Belgique*, t.35 (1992-1993), p.1-44.
- Dickstein-Bernard, C. [1997] La construction de l'enceinte bruxelloise de 1357: essai de chronologie des travaux, in *Cahiers bruxellois*, t.35 (1995-1996), p.91-128.
- Doehaerd, R. [1941] *Les relations commerciales entre Gênes, la Belgique et l'Outremont d'après les archives notariales génoises aux XIII<sup>e</sup> et XIV<sup>e</sup> siècles*, t.1: *Introduction*, Bruxelles / Rome.
- Dubois, H. [1976] *Les foires de Chalon et le commerce dans la vallée de la Saône à la fin du moyen âge*, Paris.
- DuPlessis, R.S. [1990] The Light Woollens of Tournai in the sixteenth and seventeenth centuries, in Aerts [1990] p.66-75.
- DuPlessis, R.S. [1997] One theory, two draperies, three provinces, and a multitude of fabrics: the new drapery of French Flanders, Hainaut, and the Tournaisis, c.1500-c.1800, in Harte [1997a] p.129-172.
- Duverger, J. [1971a] Gielis van de Putte, tapijtwever en tapijthandelaar te Brussel (ca.1420-na 1503), in *Arts textiles: bijdragen tot de geschiedenis van de tapijt-, borduur-, en textielkunst*, t.7, p.5-22.
- Duverger, J. [1971b] De Brusselse tapijtwever Guiliam van de vijvere en zijn atelier, in *Artes textiles: bijdragen tot de geschiedenis van de tapijt-, borduur en textielkunst*, t.7, p.99-118.
- Espinas, G. [1924] / Pirenne, H. (eds.), *Recueil de documents relatifs à l'histoire de l'industrie drapière en Flandre*, 4 vols., Bruxelles (1906-1924).
- Favresse, F. [1930] Le Conseil de Bruxelles, 1282-1421, in *RBPH*, t.9, p.139-148.
- Favresse, F. [1931a] Documents relatifs aux réformes financières entreprises par Bruxelles de 1334 à 1386, in *BCRH*, t.95, p.111-149.
- Favresse, F. [1931b] Les significations du mot "jurés" dans les actes bruxellois au moyen âge, in *BCRH*, t.10, p.141-166.
- Favresse, F. [1932] *L'avènement du régime démocratique à Bruxelles pendant le moyen âge (1306-1423)*, (Académie royale de Belgique, classe des lettres et des sciences morales et politiques; Mémoires, t.30), Bruxelles.
- Favresse, F. [1934a] Esquisse de l'évolution constitutionnelle de Bruxelles depuis le XII<sup>e</sup> siècle jusqu'en 1477, in *ASAB*, t.38, p.46-82.
- Favresse, F. [1934b] Documents relatifs à l'histoire politique intérieure de Bruxelles, de 1477 à 1480, in *BCRH*, t.98, p.29-125.
- Favresse, F. [1934c] La keure bruxelloise de 1229, in *BCRH*, t.98, 311-334.
- Favresse, F. [1938] Actes intéressant la ville de Bruxelles 1154 - 2 décembre 1302, in *BCRH*, t.103, p.355-512.
- Favresse, F. [1945] Le premier règlement accordé au métier des tisserands de lin de Bruxelles par l'Amman et la "Loi" de la ville, in *BCRH*, t.110, p.51-73.
- Favresse, F. [1946a] Dix règlements intéressant la draperie bruxelloise, 1376-1394, in *BCRH*, t.111, p.143-166.

- Favresse, F. [1946b] Règlements inédits sur la vente des laines et des draps et sur les métiers de la draperie bruxelloise (1363-1394), in *BCRH*, t.111, p.167-234.
- Favresse, F. [1946c] Les premiers statuts connus des métiers bruxellois du duc et de la Ville et note sur ces métiers, in *BCRH*, t.111, p.37-91.
- Favresse, F. [1947a] Actes inédits du Magistrat et de la Gilde de Bruxelles relatifs à la draperie urbaine depuis 1343 environ jusqu'à l'apparition de la "nouvelle draperie" vers 1440, in *BCRH*, t.112, p.1-101.
- Favresse, F. [1947b] Note et documents sur l'apparition de la "nouvelle draperie" à Bruxelles, pendant les XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles, in *BCRH*, t.112, p.143-167.
- Favresse, F. [1949] Le complexe des métiers du tissage à Bruxelles pendant les XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles, in *RBPH*, t.27, p.61-84.
- Favresse, F. [1950] Les débuts de la nouvelle draperie bruxelloise appelée aussi draperie légère de la fin du XIV<sup>e</sup> siècle à 1443, in *RBPH*, t.28, p.462-477.
- Favresse, F. [1951] La petite draperie bruxelloise, 1416-1466, in *RBPH*, t.29, p.486-496.
- Favresse, F. [1952] Sargie, Sargieambacht et petite-draperie à Bruxelles à la fin du XIV<sup>e</sup> siècle, in Favresse [1961] p.85-93. (origin., in *Mélanges Georges Smets*, Bruxelles).
- Favresse, F. [1955a] Les draperies bruxelloises en 1282, in *RBPH*, t.33, p.295-316.
- Favresse, F. [1955b] Sur un passage du privilège ducal du 12 juin 1306, concernant la Gilde bruxelloise de la draperie, in *RBPH*, t.33, p.602-608.
- Favresse, F. [1957] Comment on choisissait les jurés de métier à Bruxelles pendant le moyen âge, in *RBPH*, t.35, p.374-392.
- Favresse, F. [1959] Considérations sur les premiers statuts des métiers bruxellois, in *RBPH*, t.37, p.919-940.
- Favresse, F. [1961] *Études sur les métiers bruxellois au moyen âge*, (Université libre de Bruxelles), Bruxelles.
- Godding, P. [1953] Liste chronologique provisoire des ordonnances intéressant le droit privé et pénal de la ville de Bruxelles (1229-1657), in *Bulletin de la commission royale des anciennes lois et ordonnances de Belgique*, t.17, p.339-400.
- Godding, P. [1956] Les quatre hamèdes de la ville de Bruxelles, in *Cahiers bruxellois*, t.1, p.249-259.
- Godding, P. [1962] La bourgeoisie foraine de Bruxelles du XIV<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle, in *Cahier bruxellois*, t.7, p.1-64.
- Godding, P. [1975] Impérialisme urbain ou auto-défence : le cas de Bruxelles (XII<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècle), in *De Brabantse stad. 4de Colloquium, Brussel 29-30 maart 1974 (Bijdragen tot de geschiedenis*, Jg. 58), p.117-138.
- Grootaers, W. [1993] Praal en tegenspoed van de Lierse lakennijverheid (13de-16de eeuw), in *Lira Elegans*, Jaarboek 3, p.105-126.
- Harte, N.B. [1983] / Ponting, G.(eds.), *Cloth and clothmaking in Medieval Europe*, London.
- Harte, N.B. [1997a] (ed.), *The new draperies in the Low Countries and England*. (Pasold studies in textile history, no.10), Oxford UP.
- Harte, N.B. [1997b] Introduction, in Harte [1997a] p.1-6.
- Henne, A. [1845] / Wauters, A., *Histoire de la Ville de Bruxelles*, 3 vols., (Librairie encyclopédique de péricchon Bruxelles), Bruxelles.
- Joosen, H. [1935] (ed.), Recueil de documents relatifs à l'histoire de l'industrie drapière à Malines (des origines à 1384), in *BCRH*, t.99, p.365-572.
- Kerridge, E. [1985] *Textile manufactures in Early Modern England*, Manchester.
- Kreps, D.J. [1953] Bruxelles, résidence de Philippe le Bon, in Bruxelles [1953] p.155-163.
- Laurent, H. [1934] Choix de documents inédits pour servir à l'histoire de l'expansion commerciale des Pays-Bas en France au moyen âge (XII<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècle), in *BCRH*, t.98, p.335-416.
- Laurent, H. [1935] *Un grand commerce d'exportation au moyen âge. La draperie des Pays-Bas en France et dans les Pays méditerranéens (XII<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècle)*, Paris.
- Lis, C. [1997] / Soly, H., Different paths of development: Capitalism in the Northern and Southern Netherlands during the Late Middle Ages and the Early Modern Period, in *Review*, vol.20, p.211-242.
- Luykx, T. [1948] Een klachtenlijst van Brabanders over hun wederrechtelijke behandeling op Vlaams grondgebied in 1260, in *BCRH*, t.113, p.1-40.
- Malowist, [1931] Le développement des rapports économiques entre la Flandre, la Pologne et les pays limitrophes du XIII<sup>e</sup> au XIV<sup>e</sup> siècle, in *RBPH*, t.10, p.1013-1065.
- Malowist, M. [1972a] *Croissance et régression en Europe, XIV<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècles. Recueil d'articles*, Paris.
- Malowist, M. [1972b] Les changements dans la structure de la production et du commerce du drap au cours du XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles, in Malowist [1972a] p.53-62.
- Martens, M. [1943] *Actes relatifs à l'administration des revenus domaniaux du Duc de Brabant*, Bruxelles.
- Martens, M. [1953a] Bruxelles, capitale, in Bruxelles [1953]

- p.33-52.
- Martens, M. [1953b] *L'administration du domaine ducal en Brabant au moyen âge (1250-1406)*, Bruxelles.
- Martens, M. [1959] Note sur l'époque de fixation du nom des sept lignages bruxellois, in *Cahiers bruxellois*, t.4, p.173-193.
- Martens, M. [1961] Introduction à l'étude des moulins à eau de Bruxelles, in *Folklore brabançon*, p.5-54.
- Martens, M. [1963] Les survivances domaniales du castrum carolingien de Bruxelles à la fin du moyen âge, in *Le moyen âge*, p.641-655.
- Martens, M. [1966] Une source perdue : les listes ou les livres où l'on inscrivait le nom des échevins et leur appartenance lignagère, antérieurement au XVIIe siècle, in *ASAB*, t.51, (1962-1966), p.157-192.
- Martens, M. [1967] Du vestgeld aux droits d'usage concédés sur les premiers remparts des grandes villes brabançonnaises au moyen âge, in *Miscellanea Mediaevalia in memoriam Jan Frederik Niermeyer*, Groningen, p.283-292.
- Martens, M. [1973] Bruxelles, capitale, de fait sous les Bourguignons, in *Westfälische Forschungen Mitteilungen des Provinzialinstituts für westfälische Landes- und Volksforschung des Landschaftsverbandes Westfalen-Lippe*, 25. Bd., Münster, p.180-187.
- Martens, M. [1976a] (dir.), *Histoire de Bruxelles*, Toulouse.
- Martens, M. [1976b] Introduction, in Martens [1976a] p.5-10.
- Martens, M. [1976c] Bruxelles, centre d'un comté de type seigneurial (1040-1291), in Martens [1976a] p.47-83.
- Martens, M. [1976d] Du site rural au site semi-urbain (695-1040), in Martens [1976a] p.27-46.
- Martens, M. [1977] Les chartes relatives à Bruxelles et à l'ammanie (1244-1338), conservées aux archives de la ville de Bruxelles, in *Recueil VI des Tablettes du Brabant*.
- Moureaux-Van Neck, A. [1965] L'aide brabançonne de 1374, in *Hommage au professeur Paul Bonenfant (1899-1965)*, Bruxelles, p.267-283.
- Moureaux-Van Neck, A. [1966] Un aspect de l'histoire financière du Brabant au moyen âge : les aides accordées aux Ducs entre 1356-1430, in *ASAB*, t.51, (1962-1966), p.65-94.
- Munro, J.H. [1977] Industrial protectionism in medieval Flanders: urban or national ? in Miskimin, A.H.(ed.), *The medieval city*, London, p.229-253.
- Munro, J.H. [1978] Wool price schedules and the qualities of English wools in the Later Middle Ages, in *Textile history*, t.9, p.118-169.
- Munro, J.H. [1979] Monetary contraction and industrial change in the late-medieval Low Countries, 1335-1500, in Mayhew, N.J.(ed.), *Coinage in the Low Countries (880-1500)*, (B.A.R. international series, 54), Oxford, p.95-161.
- Munro, J.H. [1981] Mint policies, ratios, and outputs in the Low Countries and England, 1335-1420 : some reflections on new data, in *The numismatic chronicle*, t.141, p.71-116.
- Munro, J.H. [1983] Economic depression and the arts in the fifteenth-century Low Countries, in *Renaissance and reformation*, t.19, p.235-250.
- Munro, J.H. [1990] Urban regulation and monopolistic competition in the textile industries of the late medieval Low Countries, in Aerts [1990] p.41-48.
- Munro, J.H. [1991] Industrial transformation in the North-Western textile trades, c.1290-c.1340 : economic progress or economic crisis ? in Campbell, B.M.S.(ed.), *Before the Black Death : studies in the "Crisis" of the early fourteenth century*, Manchester / New York, p.110-148.
- Munro, J.H. [1994] Industrial entrepreneurship in the late-medieval Low Countries : urban draperies, fullers, and the art of survival, in Klep, P. / Van Cauwenberghe, E. (eds.), *Entrepreneurship and the transformation of the economy (10th-20th centuries) : essays in honour of Herman Van der Wee*, Leuven, p.377-388.
- Munro, J.H. [1997] The origins of the English 'New Draperies' : the resurrection of an old Flemish industry, 1270-1570, in Harte [1997a] p.35-127.
- Nicholas, D. [1976] Economic reorientation and social change in 14th-century Flanders, in *Past & Present*, no.70, p.3-29.
- Nicholas, D. [1992] *Medieval Flanders*, London / New York.
- Nicholas, D. [1997] *The later medieval city 1300-1450*, London / New York.
- Noordegraaf, L. [1997] The new draperies in the Northern Netherlands, 1500-1800, in Harte [1997a] p.174-195.
- Peeters, J.-P. [1971] Bloei en verval van de middeleeuwse stadsnijverheid Vilvoorde, in *Eigen schoon en de Brabander*, Jg.45-47, 1971-1974.
- Peeters, J.-P. [1978] Nieuwe gegevens betreffende de draperie te Vilvoorde op het einde der middeleeuwen, in *Eigen schoon en de Brabander*, Jg.61, p.157-184.
- Peeters, J.-P. [1982] De betekenis der stad Zoutleeuw als cen-

- trum van lakennijverheid in Brabant van de 13de tot de 16de eeuw, in *Eigen schoon en de Brabander*, Jg. 65, p.14-54 ; p.193-215 ; p.430-473.
- Peeters, J.-P. [1983] De economische, sociale en politieke corporatieve structure der wolwevers in de grote draperie centra in Vlaanderen, Brabant en Artesië tijdens de 13de en de 14de eeuw : gegevens voor een comparatief onderzoek, in Craeybeckx [1983] p.1-60.
- Peeters, J.-P. [1984] De productiestructuur der Mechelse lakennijverheid en de ambachten van wevers en volders van 1270 tot 1430, in *HKKM*, t.88, p.93-158.
- Peeters, J.-P. [1985] Een bedrijf tussen traditie en vernieuwing : de Brusselse draperie in de 15e eeuw (1385-1497), in *Tijdschrift voor Brusselse geschiedenis*, Jg.2, p.123-162.
- Peeters, J.-P. [1986] Sterkte en zwakte van de Mechelse draperie in de overgang van middeleeuwen naar nieuwe tijd (1470-1520), in *HKKM*, t.90, p.129-176.
- Peeters, J.-P. [1987] De weversambachten te Brussel en te Leuven in de 14de eeuw : een vergelijkend overzicht, in *Tijdschrift voor Brusselse geschiedenis*, Jg.4, p.3-28.
- Peeters, J.-P. [1988a] De-industrialization in the small and mediumsized towns in Brabant at the end of the Middle Ages. A case study : the cloth industry of Tienen, in Van der Wee [1988a] p.165-186.
- Peeters, J.-P. [1988b] De stedelijke lakennijverheid en haar alternatieven te Tienen op het einde van de middeleeuwen, in *Eigen schoon en de Brabander*, Jg.71, p.121-142.
- Peeters, J.-P. [1989] De middeleeuwse lakennijverheid in de stad Diest tot omstreeks 1400 : organisatie en betekenis, in *Eigen schoon en de Brabander*, Jg.72, p.245-279.
- Peeters, J.-P. [1992] Het register van de Brusselse lakengilde uit de jaren 1416-1417 : een getuigenis van de praktijk van de gereguleerde draperie in de stad Brussel tijdens de late middeleeuwen, in *BCRH*, t.158, p.75-152.
- Pirenne, H. [1905] Une crise industrielle au XVIe siècle. La draperie urbaine et la "nouvelle draperie" en Flandre, in *Bulletin de l'académie royale de Belgique, classe des lettres*, p.489-521 (邦訳大塚 [1955]).
- Pirenne, H. [1929] *Histoire de Belgique*, t.1, (5<sup>e</sup> éd.), Bruxelles.
- Renouard, Y. [1935] Achats et paiements de draps flamands par les premiers papes d'Avignon, in *Mélanges d'archéologie et d'histoire*, t.52 (Ecole française de Rome), p.273-313.
- Smolar-Meynart, A. [1985] Bruxelles : l'élaboration de son image de capitale en politique et en droit au moyen âge, in *Bijdragen tot de geschiedenis, inzonderheid van het oud hertogdom Brabant*, t.68, p.25-45.
- Sortor, M. [1998] The Ieperleet affair : the struggle for market position in Late-Medieval Flanders, in *Speculum*, no.73, p.1068-1100.
- Spallanzani, M. [1976] (ed.), *Produzione, commercio e consumo dei panni di lana (nei secoli XII-XVIII)*, (Istituto internazionale di storia economica «F.Datini», Prato), Firenze.
- Stengers, J. [1979] et al.(eds.), *Brussel. Groei van een hoofdstad*, Antwerpen.
- Uyttebrouck, A. [1975] *Le gouvernement du duché de Brabant au bas moyen âge (1355-1430)*, (Travaux de la faculté de philosophie et lettres de l'Université libre de Bruxelles, t.59), 2 vols., Bruxelles.
- Uyttebrouck, A. [1976] De politieke rol van de Brabantse steden in de late middeleeuwen, in *Bulletin du crédit communale de Bruxelles*, no.116, p.115-130.
- Uyttebrouck, A. [1980] Brabant-Limburg 1404-1482, in *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, t.4, Haarlem, p.224-246.
- Van der Wee, H. [1966] De Lierse stadseconomie tijdens de 14de en vooral 15de eeuw, in *'t Land van Rijen*, t.16, p.28-37.
- Van der Wee, H. [1975] Structural changes and specialization in the industry of the Southern Netherlands 1100-1600, in *The economic history review*, vol.28, p.203-221.
- Van der Wee, H. [1984] De industriële ontwikkeling in de Nederlanden tijdens de 17de-18de eeuw : enkele historische bemerkingen naar aanleiding van het debat over de Proto-Industrie en poging tot aanvulling van het synthese-model, in *Academia Analecta*, t.46, p.59-77 (邦訳藤井 [1987]).
- Van der Wee, H. [1987] Antwoord op een industriële uitdaging : de Nederlandse steden tijdens de late middeleeuwen en nieuwe tijd, in *Tijdschrift voor geschiedenis*, t.100, p.169-184.
- Van der Wee, H. [1988a] (ed.), *The rise and decline of urban industries in Italy and in the Low Countries (late Middle Ages-early Modern Times)*, Leuven.
- Van der Wee, H. [1988b] Industrial dynamics and the process of urbanization and de-urbanization in the Low Countries from the late Middle Ages to the eighteenth century : a synthesis, in Van der Wee [1988a] p.307-381.



- Van der Wee, H. [1990] *Growth and stagnation in the urban network of the Low Countries (14th-18th centuries)* (Workshop on Quantitative Economic History : Research Paper 90.01), Leuven.
- Van Houtte, J.A. [1962] Die Städte der Niederlande im Übergang vom Mittelalter zur Neuzeit, in *Rheinische Vierteljahrsblätter*, t.27, p.50-68.
- Van Parys, H. [1956] Le bombardement de 1695 et les archives de l'hôtel de ville, in *ASAB*, t.48, p.152-155.
- Van Parys, H. [1958] Notes sur les lignages de Bruxelles en 1376, in *Brabantica*, t.1, 1956, p.305-331 ; t.2, 1957, p.93-112 ; t.3, 1958, p.195-216.
- Van Parys, H.C. [1959] L'admission aux lignages de Bruxelles, in *Cahiers bruxellois*, t.3, 1958, p.107-137, p.253-281 ; t.4, 1959, p.9-30.
- Van Parys, H.C. [1960] A propos de l'époque de fixation du nom des sept lignages bruxellois, in *Cahiers bruxellois*, t.4, p.165-192.
- Van Uytven, R. [1962] Plutokratie in de "Oude demokratiën der Nederlanden", in *Handelingen der koninklijke Zuidnederlandse maatschappij voor taal-en letterkunde en geschiedenis*, t.16, p.373-409.
- Van Uytven, R. [1976] La draperie brabançonne et malinoise du XII<sup>e</sup> au XVII<sup>e</sup> siècle : grandeur éphémère et décadence, in Spallanzani [1976] p.85-97.
- Verlinden, C. [1936] Contribution à l'étude de l'expansion commerciale de la draperie flamande dans la Péninsule ibérique au XIII<sup>e</sup> siècle, in *Revue du Nord*, t.22, p.5-20.
- Verlinden, C. [1937] Draps des Pays-Bas et du Nord de la France en Espagne au XIV<sup>e</sup> siècle, in *Le moyen âge*, t.47, p.21-36.
- Verlinden, C. [1943] Brabantsch en Vlaamsch laken te Krakau op het einde der 14de eeuw, in *Mededelingen van de koninklijke Vlaamsche academie voor wetenschappen, letteren en schoone kunsten van België, klasse der letteren*, t.5, p.5-21.
- Verlinden, C. [1966] Draps des Pays-Bas et du Nord-Ouest de l'Europe au Portugal au XV<sup>e</sup> siècle, in *Anuario de Estudios Medievales*, t.3, p.235-267.
- Verlinden, C. [1968] Deux pôles de l'expansion de la draperie flamande et brabançonne au XIV<sup>e</sup> siècle : la Pologne et la Péninsule ibérique, in *L'institut d'histoire de la culture matérielle de l'académie polonaise des sciences*, année 16, p.679-689 (reprod., in *Studia historica gandensia*, no.104, 1968).
- Verlinden, C. [1976] Aspects de la production, du commerce et de la consommation des draps flamands au moyen âge, in Spallanzani [1976] p.99-112.
- Wellens, R. [1962] Une relation inédite du bombardement de la ville de Bruxelles par le maréchal du Villeroy en 1695, in *Cahiers bruxellois*, t.7, p.203-212.
- Wolff, P. [1950] English cloth in Toulouse, 1380-1450, in *The economic history review*, vol.2, p.290-294.
- Wolff, P. [1954] *Commerces et marchands de Toulouse, vers 1350-vers 1450*, Paris.
- Wolff, P. [1983] Three samples of English 15th-century cloth, in Harte [1983] p.120-125.
- Wyffels, C. [1973] Kanttekening bij de Brugse Moerlemayse 1280-1281, in *Album Albert Schouteet*, Brugge, p.253-258.

邦語

- 大塚久雄 [1955] / 中木康夫 (訳 / H. ビレンヌ著) 「16世紀の産業危機——フランドルにおける都市毛織物工業と「新興毛織物工業」——」『資本主義発達の諸段階』 <未来社> p.59-110.
- 佐藤弘幸 [1999] 「フランドル毛織物工業史序論」『東京外国語大学百周年記念論文集』 <東京外国語大学> p.351-387.
- 斯波照雄 [1997] 「中世ハンザ都市の研究——ドイツ中世都市の社会経済構造と商業——」 <劉草書房>.
- 藤井美男 [1987] (訳 / H. ヴァン＝デル＝ウェー著) 「中世後期—アンシャンレジーム末期ネーデルラントの工業成長——プロト工業化論への批判的考察と統合モデル構築の試み——」 森本 [1987] p.242-272.
- 藤井美男 [1994] 「中世後期ブリュッセルの財政構造——毛織物ギルドとショセの財政をめぐる——」『経済学研究』 <九州大学> 第59巻第3・4合併号, p.193-210.
- 藤井美男 [1995] 「中世後期ブリュッセルの財政に関する一考察——財政をめぐる中世都市と領邦君主——」『商経論叢』 <九州産業大学> 第35巻第4号, p.103-132.
- 藤井美男 [1998] 「中世後期南ネーデルラント毛織物工業史の研究——工業構造の転換をめぐる理論と実証——」 <九州大学出版会>.
- 藤井美男 [2000] 「14-15世紀ブリュッセルにおける権力構造の再編——毛織物ギルドとナシオンの統合をめぐる——」 田北廣道 (編・著) 『中・近世西欧における社会統合の諸相』 <九州大学出版会> p.393-426.
- 森本芳樹 [1987] (編・訳) 『西欧中世における都市と農村』 <九州大学出版会>.

山瀬善一 [1956a] 「中世フランドルの毛織物と明礬」  
『国民経済雑誌』 <神戸大学> 第94巻第1号, p. 48-  
66.

山瀬善一 [1956b] 「中世ブリュッセルの毛織物」 『国  
民経済雑誌』 <神戸大学> 第93巻第2号, p. 67-79.

〔九州大学大学院経済学研究院教授〕